いません。私の目では彼奴が鬼に見えたり、又綺麗な天人に見えたりして仕方がありませんワ……それ〳〵大速力で此方へ下つて來ませうがな、早く準備をして下され」

高姫「エー、準備をせうと思うておつたのに、お前が出て來て、せうもない事を喋り、肝腎の時間を潰さして了つたものだから、惡魔の方が早く來よつたのだ。あゝ此處でも具合が惡い、第三の計畫に移らう」

と云ひ乍ら、顏を眞青になし、又もや次の山を轉けつ輾びつ駈け上る。シャルも是非なく黑い褌をたらし乍ら、高姫の足型を尋ねて、息も苦しげに跟いて行く。

（大正一二、三、一六、舊一、二九、於龍宮館、松村眞澄錄）

第三篇　月照荒野

第一〇章　十字（一四四〇）

エルシナ川の堤に引上げられ、ビクトル山の修驗者求道居士に救はれたベル、ヘルケリナの三人はエルシナ川の谷川を遡りバインの木蔭を縫ひ乍ら、やゝ廣き青野ケ原に出た。こゝには色々の美しき花が咲き充ちてゐる。一同は路傍の平岩に腰打掛け息を休めてゐる。求道居士は珠數を爪繰り乍ら、

道『天龍虎、王命、勝嘿、大水日。天龍虎、王命、勝嘿、大水日』

と繰返し〳〵呪文を唱へた。

ヘル『モシ、修驗者樣、吾々は貴方のお蔭で命のない所を助けて頂きましたが、今のお經は何だか知りませぬが、頭に浸み渡つて有難い樣な氣分が致します。何卒その呪

文の御解釈をして頂けますまいか」

求道「あ、よし／＼、この呪文はバラモン教の神秘となつてゐるのだ。お前さん等が水に溺れて絶命れて居つたのを呼び戻したのも此十字の祕法のお蔭だよ。何時もこれさへ唱へて居つたならば、あの樣な災難に罹る樣な事はチッともない。起死回生諸災除攘の神秘的呪文だ。一つ解譯をするから聞きなさい。

天龍虎、王命、勝喝、大水日。　天龍虎、王命、勝喝、大水日。

この十字の祕傳は神變不可思議の神德が顯れ、如何なる願望も成就し、又如何なる災禍も除却することが出來るのだ」

ヘル「どうか其の字の功德に就て御教示を願ひたいものですなア」

求道「ヨシ／＼由緣を聞けば有難い。重ねて言へば猶有難いと云ふ神傳祕法の呪文だから、能く胸に疊み込んでおくが好い。

抑々

天は高貴大官の前に出る時之を書くのだ。又航海渡船の時に之を書いても可い、さすれば高官には自分の意志が完全に通じ且つ難破船の災を免れる。

龍は海河又は船橋を渡る時に書いて持つものだ。又大風雨に向つて出達する時に之を書けば凡ての海河風雨の難を免れる。

虎は廣野原野深山に行かむと欲する時に書くのだ。又山獵の時とか賊に出遭つた時に書けばその難を免れる。

王は惡人等に對する時之を書きて持つものだ。又不時に應ずる時、裁判の時に之を書くのも可い。屹度神の御守護がある。

命は人の家にて怪しき茶、酒、飲食を與へられた時に之を書くのも可い、又敵に向つた時之を書いて持つも可い。屹度災難を免れる。

勝は軍陣並に萬の勝負の時に書く、又賣買の時に書くのもよい。

喧は疾病のある家に行かんとする時、又は諸々の惡人の集まつて居る所に行かんとする時に書くのだ。屹度神德が顯はれる。

大は怪しと思ふ場所や又淋しき所に出行く時とか、惡病、傳染病の人を見舞ふ時に之を書くものだ。

水は案内を知らぬ家に行く時又は酒席に出る時、身構へ、清淨の時、又水論のある時に之を書くと可い。

日は萬の祝言や慶事喜悅に關する時、又は病人を訪れる時に書いて持つて居れば相方共に御神德を頂く事が出來るのだ。是は婆羅門教の祕事中の祕術だから、妄りに人に傳へると濫用する恐れがあるから、固く人に傳ふることを嚴禁されてあるのだ

以上の十字を以て婆羅門十字の大法と稱にるのだ。之を行ふには男は左の手、女は右の手にて刀印にて空書するのだ。又刀印を硯に施して白紙に書して懷中して居るのも結構だ。然し、これより尙尊い事があるのだ。併し乍ら、餘り勿体なくて口にすることが出來ないから身魂相應に十字の呪文を空書したり、唱へたりして修行に歩いてゐるのだ」

ヘル「これよりも有難い尊い事とはどんな事でムいますか。何卒序に聞かして下さいませな。私も貴方に助けられて此御恩を返すためには世界の人間も助けさして貰ひ度うムいますから」

求道『お前が御神徳を私せず、世界の人間を助けさして貰ひ度いと云ふ誠心があるならば傳授してやらう。一番尊い事と云ふのは天の數歌と云つて「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百千萬一」と唱へるのだ。之は天地開闢の初から今日に至る迄、無限絶對力の神様が此天地を創造し、神徳を世界に充たし愛善の徳と信眞の光明を吾々人間にお授け下さる神文だ。そして「惟神　靈幸倍坐世」と後で唱へるのだ。之に越したる尊い言葉は三千世界にないのだからよく聞いておきなさい』

ヘル『いや、如何も有難う厶りました。お蔭で結構な御神徳を頂戴しました。サンキュー〳〵』

求道『無駄口を云ふ間があつたら此神文をお唱へするのだ。さうすればどんな事でも忍耐ぴがついて、天晴神様の御用に使ふて貰ふ事が出來るのだ。併し乍ら歌を歌ふ様な氣持になつて唱へては駄目だから、よく慎んで唱へたが宜しいぞ』

ヘル『サンキュー〳〵』

ベル『アハ、、、ナーンだ。龍だの、虎だの、貂だの、鵬だのと勿体らしく仰有いまして、その又後に商人か大工の様に數字を並べたり、鉋だとか、鑿だとか、笑はしやがるわい。アハ、、、これ丈け人文の發達した世の中に、そんな寝言の餘り言の様な事を云つて廻る修驗者の氣が知れないわ。ウフ、、、』

ヘル『こりやベル、修驗者求道居士様は、もとは吾々のカーネル、エミシ様だが、結構な呪文を唱へて俺等を助けて下さつたのに、何と云ふ畏れ多い事を云ふのだ。勿体ないじやないか』

ベル『ハ、、、貴様も亦軟化しやがつたな。何と云つても壽命のある者は死ぬものかい

入衢で「まだお前は生命があるから歸れ」と云つたじやないか。別に修驗者の力でも何でも無い。此世にまだ生存の力を持つてゐるから生還つたのだよ。そんな馬鹿な事云ふものぢやない。それよりも商賣に勉強した方が何程利益だか分らないわ

これからワールドを股にかけワールドウ(惡胴)を据へて泥坊商賣を勉強した方が忽ちお蔭がある。何程十字の祕法を唱へても、一、二、三、四と云つて數へて居つても一文の金も降つて來はせんぢやないか。そんな事ア世捨人のする仕事だ。俺等は日々の生活難を凌いて行かんならぬから、そんな陽氣な事は云つて居れないわ。肉体のある限り食物も採らねばならず、人間の體は實在物だからヤッパリ實在的物質が何よりも肝腎だ。空々漠々たる無形の呪文が何になるか。馬鹿だなア」

求道「ハ、、、、ベルはどうしても分らぬと見ゐるな。そしてお前はゼネラル樣から、あれ丈けのお金を頂いた時に、正業に就きますと云つたぢやないか。それにも拘はらずまだ泥坊をこれからやらうと云ふのか」

ベル「何分人間はパンが肝腎ですから、私のやうな無資産者は、泥坊なつとやらなくちや仕方がありませんわい。何程神を祈つて居つても一片のパンも湧いては來ませんからな。神樣だつて有るとも無いとも、そんな事アあてになりませんわい」

求道「お前は、さうすると何處迄もア、セーズムを主張するのかな。困つたものだな。人間の力で木の葉一枚だつて出來るものでないと云ふ事を知つてるだらう。さうすれば山川草木を拵へた原動力がなければならぬ筈だ。人間以外の物がなければ此天地は造れるものでない。よく考へて見るが宜からうぞ」

ベル「それは人間が出來ない事は分つてゐます。自然の力で一切萬物が出來て居るので

す。その自然を貴方等は神と云ふのですか。貴方等はフテキズムだ。もしも違ふたらナチュラル、ワーシップだ。私は神なぞが決して此世に存在するとは思はれませんわい」

求道「どうも仕方のない男だなア。まア〳〵緩りと胸に手を當てゝ考へて見るが宜からう」

ヘル「オイ、ベル、人間は神を離れて一日も此世の中に生きて居る事は出來ないぞ。皆神様のお蔭だ。そんな勿体ない事を云はずに神様を禮拜する氣はないか。お前もこれから天國に救はれるか、地獄に墮するかと云ふ堺目だからトックリ求道様のお話を聞いて考へて見たら如何だ」

ベル「ウン、そんなら一つ求道さんにお尋ねしますが、一体神様は此天地の間にどれ丈けムるのですか」

求道「天津神八百萬、國津神八百萬と云つて億兆無數の神様がムるのだ。それ〳〵お役目を分掌遊ばして此世の中を守つて下さるのだから、人間は神様を信仰せなくてはなりませんぞ」

ベル「それ丈け澤山の神様があつたら却つて世界が治まらぬぢやありませんか。貴方のお説はどうも私の腑に落ちない。その筆法で云へば一切神ばかりで此世の中は埋もつて了ひ、人間の住居する場所はないぢやありませんか。そんなポリセズムは新教育を受けた吾々の耳には餘り古臭くて這入りませんがな」

求道「神様は元は只お一柱だ。その神様は大國治立尊と云つて宇宙一切をお構ひ遊ばす太元神様だから此神の水火から生れた色々の天人が八百萬の神となつて御守護

遊ばしてムるのだ。それだから之を卷けば一神となり、之を開けば多神となる。所謂神樣は一神にして多神、多神にして一神だ。吾々と雖もヤッパリ神樣の御神体の一部分だ」

ベル「益々分らなくなつて來た。お前さんの言ふ事はモノゼーズムかと思へばポリセーズムになつて了ふ。ポリセーズムかと思へば一轉してパンエンテーリズムになるぢやないか。そんな據りない神樣を禮拜するのは眞平御免だ。エー〳〵こんな話を聞いて居ると氣分が惡くなる。それよりも現實的にお蔭を頂く事をやり度いものだ。さア之から俺の幕だ」

と云ひ乍ら捻鉢卷をグッと縮め瘤だらけの腕をニュッと前につき出し、

ベル「おい、修驗者、こゝを何處と心得てる。勿体なくも天下の大泥坊ベルさんの縄張り區域だぞ。さア〳〵キリ〳〵チヤッと持物一切投げ出して行かつせい。猪倉山で隨分々々配金を貰つたゞらうから、まだ持つて居るだらう。それを此方へスッパリ渡して行け。お慈悲に着物だけは助けてやるから」

求道「アハ、、、、困つた奴だな。金は此處にまだ一萬兩ばかり持つて居るが、之は世界の困つた人間を助けるための物質的の寶だ。お前の樣な泥坊にやる金は一文も持たない。將軍樣から大金を頂いて改心するかと思へば益々惡黨になるやうな代物だから、お前を救けやうと思へば一厘だつて渡す事は出來ぬ。それよりも無形の寶を頂いて誠の人間になつたら如何だ」

ベル「アハ、、、、何と仰有つてもパンを與へられねば信仰は出來ない。俺を信仰の道に入れ度いと思ふなら先づパンを與へよだ。早く其金を此方へ……皆迄とは云はぬ

から五千兩ばかり渡して呉んねい。さすれば此金のある間は信者になつても可い」

ヘル「到頭本音を吹きやがつたな。もし先生、こんな奴に與る金があつたら乞食におやりなさい。ます〳〵此奴を地獄の底へ墮す樣なものですからな」

求道「如何にもお前の云ふ通りだ。こんな者に金を持たしたら狂人に松明を持たすも同然だ。まア止めて置かうかい」

ベル「こりやヘル、貴樣の懷がヘルのでもないのに横合から何をしやベルのだ。人の商賣の妨害をさらしやがつて、もう量見ならん。これから貴樣と命の奪合ひをして勝つた方がケリナを女房にするのだ。さア來い、勝負だ」

と手に唾をつけ挑戰する。

ヘル「ハヽヽヽヽ、そりや何さらしてるのだ。そんな目を剝いて芝居をしたつて恐がる奴は一人もありやせないぞ。なあケリナさん、本當に下劣な男ぢやありませんか。下劣ばかりならまだしもだが、無智暗愚極惡無道、所在罪惡を具備して居るモンスターだから困つた者ですわい。併しケリナさん、お怪我があつてはなりませぬから、先生のお側を離れないやうにして下さい。之から此惡人と奮闘して懲しめてやりますから」

ケリナ「ホヽヽヽ、何程ベルさんが凄い文句を並べて威張つた所で誰も驚くものはありませぬわ。そして妾の夫鎌彦さんを殺したのも此奴だから、謂はゞ夫の敵、見逃しは致しませぬ。お前さん、そこに待つて居なさい。妾が美事ベルを平げてお目にかけませう。そしてお前さんも矢張り夫を殺した仲間だから此次ぎはヘルさんだから樂しんで待つて居なさい」

ヘル「いや、此奴あチッと都合が惡いわい」

ベル「ワッハ、、、、態あ見ろ。ケリナに現を抜かしやがつて旣に亭主になつた氣取りで居つたが、今の態は何だい。大馬鹿者奴、先見の明が無いと云つても餘りぢやないか、ウッフ、、、」

ヘルは捻鉢巻をし乍ら

ヘル「何、猪口才な、俺も今迄惡人だつたが最早神樣の光に照らされた善人だ。貴樣のやうな惡事はせない。一つ目に物見せてやるから覺悟をせい」

と矢庭にベルに跳びついて行く。

ベル「何、猪口才な」

と側に落ちて居た棒片を手に取るより早く眞向に振り翳し、木葉微塵になれよとばかり打下ろした途端に、ヘルの肩を強か打つた。ヘルは怒り心頭に達し、矢庭にベルの髻を引掴み引摺り初めた。ベルは痛さに堪へ兼ね、悲鳴をあげて泣き出した。ヘルは此聲に憐れさを催し、手を放した。求道居士は一生懸命に呪文を唱へて居る。隙を狙つてベルは一生懸命に草野ケ原に四這となり、飛び込んだまゝ姿を見せなかつた。

ヘル「アハ、、、、口程にも無い奴だ。到頭遁走しやがつたな。併し乍ら陰險な奴だから何處に隱れて何をしよるか分つたものでない。ケリナさんには大變な怨みを受けて居るけれども、私の罪亡ぼしのために先生と前後になつて、ケリナさんを親許まで屆けさして貰ひませう。なア先生、許して下さるでせうな」

求道「お前の改心は確だから成るべくは親許まで屆けて、兩親にお詫をしたが宜からう

然し乍らケリナさんの御意見は何と仰有るか分らない。ケリナさん、如何しますか」

ケリナ「ハイ、實の所を申せば妾の兄を殺した鎌彦を殺して呉れた方だから、別に怨んでは居りません。送つて下さらば結構でムいます」

ヘル「サンキュー〳〵、何處までも送らして頂きます。もし、思召に叶ひましたらどんな御用でも致しますから」

求道「アハ、、、、要らん事は云はないでも宜い。それよりも十字の祕法を唱へて、さア行かう。テルモン山迄はまだ十里位もあるからグズ〳〵して居れば日が暮れる。途中で日が暮れると又惡者が飛び出すと面倒だからな」

ヘル「先生、その時には一、二、三、四……と唱へるんですな。それでいかなければ惟神霊幸倍坐世ですわい」

求道「うん、さうだ〳〵。それさへ覺えて居れば大丈夫だ。おい、ヘル、お前は先に行くのだ。そしてケリナさんを眞中にして俺が殿を勤めてやる」

ヘル「はい、先へ行かぬ事あムいませんが、そこが何だか一寸……でムいますな。先生が先へお出になるが順當でせう。お伴が先へ行くと云ふ道理がムいませんから」

求道「ハ、、、、矢張り恐いのだな。よしそんなら思召に從ひ先陣を勤めやう。さあケリナさん、續いておいでなさい」

と云ひ乍ら聲も凉しく宣傳歌を歌ひ、夏草茂る青野ケ原をスタ〳〵と進み行く。

（大正一二、三、一六、蘆、一、二九、於神宮館二階、北村隆光録）

第一一章　惚

泥（一四四一）

求道居士はヘル、ケリナ姫と共に、テルモン山の鬼國別が館をさして、草茫々たる原野を進み行く。人通りも少く、一面の原野には身を沒する許りの雜草生ひ茂り、所々に荆蕀の叢點在し、思つたやうに道が捗らない。種々の花は原野一面に咲き匂ふて居る、時々足許に蚖蛇現はれ行歩甚だ危險である。

日はずつぽりと暮れて來た。月は東方の叢の中から覗き初めた。北にはテルモン山の高峰が巍然として控へて居る。夕の風に送られて晩鐘の聲いと淋しげに諸行無常と響き來る。白赤班の鴉は空を封じてテルモン山の方面さしてガア〳〵と鳴き乍ら歸り路を急いで居る。三人は月の光を便りに進んで行つた。併し乍ら足許に匍匐してゐる蚖蛇の危險を免るゝ事は到底出來ない。何程月は登りかけても長細き雜草に隔てられ、且つ晝の如くハッキリしない、若し誤つて蚖蛇の尾でも踏まうものなら、忽ち嚙みつかれ、即座に命を落さねばならぬ危險がある。求道居士は惟神靈幸倍坐世を唱へ又、天の數歌を奏上し乍ら進んで行く。ヘルはバラモンの經を稱へながら二人の後に跟いて行く。

數歌を唱ふる事を遠慮し、ヘルはバラモンの經を稱へながら二人の後に跟いて行く。

或遇二惡羅刹一　毒龍諸鬼等一
念二彼觀音力一　時悉不二敢害一
若惡獸圍繞　利牙爪可怖
念二彼觀音力一　疾走二無邊方一
蚖蛇及蝮蝎　氣毒焰火然

念二彼観音力一　　尋聲自回去
雲雷鼓掣電　　降二雹澍大雨一
念二彼観音力一　　應時得二消散一

と唱へながら進んで行く。幸に經文の力でもあらうか、毒蛇も現はれず稍廣き草の短き所へ出た。まだこれからはテルモン山の麓へは我國の里程に換算して二里以上もある。さうして山は一里許り上らねばならぬ。そこが鬼國別の館であつた。三人はやつと危險區域を脱れ、白楊樹の麓に、折からさし登る月を眺めながら、腰を卸して休息した。此時覆面頭巾の黒裝束をした男、ノソリ〳〵と遥向ふの松林を通るのが見にた。ヘルは目敏く是を見て、

ヘル　『もし先生、今彼方へ怪しの影が通りましたが、あれは一体何でせうかな』

求道　『ウン、あれは泥坊と見にる。何か惡い目的をもつて旅人を掠めやうとやつて來たのだらうが、先方は一人此方は三人だから到底駄目だと思ふて、道を外れたのであらう。ア、可愛さうな男だなア。此世の中に爲すべき事業は澤山あるに、どうして泥坊なんかするのか、どうかして助けてやりたいものだが、もはや何處かへ行つて了つた』

ヘル　『もし先生、もう泥坊を助けるのはお止めなさい。あのベルだつてあの通りですものの。ゼネラルさんから澤山のお金を頂き、もう是切り泥坊はやらないと云ふて置き乍ら、まだ精神が直らないのですから、駄目ですよ』

求道　『それでもお前は改心したぢやないか。ベルのやうな男のみはあるまい。あれでも時節が來たならば、きつと改心するだらう』

ヘル『そりやさうです。私も實はゼネラル樣からお金を頂き、これつきり泥坊を止めて正業に就かうと思ふて居ましたに、つい惡友の爲に折角の決心が鈍り、益々惡事が增長して終には人を殺し、其天罰であの世の關所迄やられて來たやうな惡人が、今漸く改心して貴方のお伴するやうになつたのですから、泥坊だつて改心せないには限つて居りません。併し乍ら今日はケリナさんを送つて行かねばなりませんから途中で泥坊に出會つても相手にならないやうにして下さいませや』

求道『ウン、承知した。併し乍らベッタリ出會つた時にや、先方が改心せうと、しまいと、一應の訓戒は與へねばならぬ。魔道に墮ちたる人間を、修驗者として見捨る譯には行かぬからなア』

ヘル『それもさうですなア。成る可くそんなものに出會はないやうに、神樣に願つて參りませうか』

ケリナ『もしお二人樣、あの怪しい影は何うも私はベルさんのやうに思ひますが、違ひませうかな』

求道『ケリナさんのお察しの通りだ。間違ひはありますまい』

ヘル『エ、あの影がベルぢやと仰有るのですか、そいつは怪しからぬ。我々が疲勞れて野宿でもせうものなら、寢込を考へて先生のお金を取らうと云ふ考へで來よつたのでせう。仕方の無い奴ですなア』

求道『ウン仕方の無い奴だ。何程改心して居ても金の顏を見ると、直に又惡に還るのが小人の常だ。お前は俺の懷に持つて居る一萬兩の金は欲しい事は無いか』

ヘル『別に……たつて欲しいとは申しません。併し貴方が與らうと仰有れば頂きます。

これから修驗者になつて世界を歩かうと思へば旅費も要りますからなア」

求道「さうすると矢張りお前も油斷のならない男だ。トコトンの改心は中々出來ぬものと見ねるのう」

ヘル「人間は如何に神樣の御子ぢやと云つても、天國と地獄との間に介在して居る以上は、善許りでは到底世に立つていく事は出來ません。內的生活は如何やうにも出來ませうが、衣食住の爲に苦しまねばならぬ肉体は、多少の自愛心も必要でムいますからなア」

求道「刹帝利や毘舍や、首陀なれば、多少自愛の心も生存中は必要だらうが、最早修驗者となると定つた以上は金なぞは必要はない。神のまに〳〵野山に伏し、食あれば食を取り、食なければ水を飲み、水も無ければ草でも嚙んで行くのが修驗者の務めだ。一切の物慾を捨てねば神の使となる事は出來ないからのう」

ヘル「成程、仰せ御尤もでムいます。併し乍ら貴方は修驗者の身分であり乍ら、一萬兩の金を持つて居ると仰有つたぢやありませんか、どうも仰有る事が矛盾して居るやうに思はれてなりませんがなア」

求道「ハ、、、、、私は實際は無一物だ。併し乍ら心の中に一萬兩持つて居るのだ。どうかして是を投げ出したいと思ふて居るが、まだ罪業が充たないと見ねて除去する事が出來ないのだ。俺の一萬兩と云ふのは、我慢、高慢、自慢、忿慢、慢心と云ふ惡龍が一匹殘つて居ると云ふ事なのだ。此一萬龍を何とかして放り出さなくては比丘になつても天地へ耻かしくて仕方がないから、宣傳使でもなければ俗人でも無い半聖半俗の境遇に彷徨ひ、修驗者となつて居るのだ。どうぞして御神德を頂き、宣

傳使の候補者にでもなりたいものだが、仲々容易の事ではない、それがために實は困つて居るのだ」

ヘル「私は又本當のお金を一萬兩懐中に持つて厶るのかと、固く信じて居りました。先生は口でこそ恬淡無慾らしう見せて厶るが、矢張り内心は、マンモニストだと思つて居たに。形の上の寶は些も持つて居られないのですか。それで私の疑團も晴れました。ベルの奴本當に貴方が現金を所持して居ると思ひ、こんな所迄跟いて來たかと思へば可憐さうぢやありませんか」

ケリナ「ホ、、、、、ヘルさんも可憐さうぢやありませんか、貴方だつてベルと八百長喧嘩をして、旨く修驗者を誑かし、一萬兩の金を取らうと思つて來たのでせう。そんな事はちやんと、私も先生も看破してゐたのですよ。この邊で謀合はし、ポツタクル考へであつたのでせう」

求道「アハ、、、、、オイ、ヘル、もう駄目だ。俺達の前にはどんな惡も施すの餘地がないぞ。本當に改心するか、どうだ」

ヘル「ヘン馬鹿らしい、素寒貧の文なしに跟いて來たかと思へば業腹だ。オーイ、ベル一寸來い、此奴はあんな事云やがつて一萬兩持つてけつかるに違ひない、早う來い、ヤーイ」

と呶鳴り出した。忽ち驅けて來たベルは威猛高になり、

ベル「アハ、、、、今迄はバラモン軍の上官で、カーネル〳〵と尊敬して來たが、もうそんな態になつて零落て來た以上は一個の修驗者だ。サア綺麗薩張りと懐の金を渡せばよし、グズ〳〵吐すと肝腎要の命が危ないぞ。サアどうだ、返答聞かう」

求道「ハヽヽヽ、分らん奴だなア、俺の體を何處なりと調べて見よ、一文も持つて居やしないわ」

ベル「そんなら早く裸体になつて見せろ」

求道はムク〳〵と眞裸体になり、薄い着物をはたき乍ら、二人の前に放り出した。

ヘル「ハヽア、矢張り駄目だな。併し乍らこのナイスをどうしても自分の物にせなくては嘘だ。それについては此修驗者が居ると何彼の邪魔になる。サア序にバラさうぢやないか」

求道は頻りに天の數歌を奏上し始めた。ヘル、ベルの兩人は些しも頓着せず、ベルの持つて來た二本の棒千切を持つて双方より打つてかゝる。ケリナは白楊樹に抱きついて慄うて居る。求道居士は眞裸体のまゝ、一生懸命防ぎ戰うた。されど一本の木切も持つて居ない眞裸体の求道は、二人の爲に打ちのめされ其場に絶命となつて了つた。

兩人は冷やかに笑ひ乍ら、

「アハヽヽヽ、どうやらこれで俺達にもハッピネスが見舞うて來たらしい。サア是からがナイスの番だ。何と云つても斯うなれば此方の自由だ。オイ、ケリナとやら俺達二人の意志に從ふかどうだ」

ケリナ「肝腎の修驗者迄が、此通りなられたのでムいますから、女の細腕で抵抗して見た所で仕樣がムいません。御意見に從ひませう、併しラマ教のやうに多夫一妻主義はどうも面白うムいません。何方かお一人に願ひ度いものでムいますなア」

ベル「成程お前の云ふのも尤もだ。まだお前はバージン姿だから到底誰が好だの嫌ひだのと云ふ事はよう云ふまいから、一つ茲で俺達二人が抽籤をやつて、一の出た方が

お前を女房にすると云ふ事に定めやうかなア」

ケリナ『物品か何かのやうに抽籤とは餘りぢやムいませんか、どうか私に選まして頂く譯には行きますまいかなア』

ベル『ウン、それも一方法だ。善惡美醜をトランセンドして、お前の本守護神の得心した方に向いたが好からう。スタイルは醜うても心の綺麗な男らしい男もあり、何程スタイルは好くても心の汚い卑劣の男もあるからなア、そこはそれ選擇を誤らない樣にしたがよろしからうぞ』

ケリナ『そりやさうでムいますな。何と云つても男らしい男で、何處ともなしに同情心のある柔し味のある方が好ですわ、人を叩き殺して埋けてもやらないやうな方は絶對に嫌ひです』

ベル『成程俺も最前からヘルの棒が當つて死んだ修驗者に同情の涙を濺いで、どうか死骸でも隱して上げ度いと思ふて居た所だ。餘り妻の選擇に付いて氣を取られて居つたものだからウッかりして居た。是もお前を愛する心が深いのだから、決して惡くは思ふて下さるな』

ケリナ『女の美貌に現を抜かして假令ヘルさんが殺したにもせよ、死屍の横たはつて居るのを見て隱してやらうともせん男は嫌ひですわ、お前さんの棒が當つて死なゝくても同じ事ですよ。矢張り二人して殺すと云ふ考へだつたのでせう。同じ惡人に身を任す程なら、スタイルの美しいヘルさんに身を任しますわ』

ヘル『エヘヽヽヽ、オイ、ベルどうだ、戀の凱旋將軍樣だ、畏れ入つたか』

ベル『ヘン馬鹿にするない「色は年增が艮め刺す」と云つて最後の勝利は俺の手に握つ

て居るのだ」

ヘル「馬鹿云へ、御本人が承諾しない戀が何になるか、お生憎様だ、イヒ、、、」

ケリナ「ホ、、、、、揃ひも揃ふたデレ泥だ事、誰がお前さんのやうな馬鹿者に身を任すものがありますか、よい加減に自惚をして置きなさい」

ベル「オイ、何程美人だと云つてもこれだけ侮辱せられては、女房にする譯にも馬鹿らしくて出來んぢやないか、序に此奴も一緒にバラしてやらうかい」

ヘル「ウンさうだ。かう愛想盡かしを云はれては仕やうがない。女は世界に幾人でもある。此女を生かして置いては修驗者を殺したのは俺達だと云つて貰うと、此許り劍呑だから、やつつけて仕舞はうよ」

ベルは

「よし合點だ」

と矢庭に棒千切をもつて打つてかゝる。ケリナは白楊樹を盾に取つて身を脱れやうとする。ヘルは又もや棒千切をもつて腦天目蒐けて打ち卸した。憐やケリナはキャッと悲鳴を上げ其場に打ち倒れた。此の時天を焦して下り來る一大火光があつた、二人は驚いて雲を霞と森林の中を逃げて行く。火團は忽ち二人の倒れて居る前に降下した。是は第一靈國より月照彦命が、二人の危難を救ふべく神の命を帶びて下られたのである。二人は漸く火團の落下した音に氣が付き、四邊を見れば、桃色の薄絹を着した麗しきエンゼルが立つて居る。求道居士は拍手再拜して救命の恩を感謝した。ケリナも亦エンゼルを拜み一言も發せず、嬉し涙に掻き暮れて居る。エンゼルは言葉靜に兩人に向ひ

エンゼル『汝等兩人、神の大道を誤らず、身をもつて道の爲に殉じたる其志は見上げたものだ。其方の志に免じ、靈國より汝等を救ふべく下つて來た。我は月照彦神である。隨分氣をつけてテルモン山に歸つたがよからう。それ迄に、も一度試みに遇ふ事があるだらう。屹度自分の命を惜むやうな事では世を救ふ事は出來ないから、何事も神に任して救ひの道を拓いたらよからう。さらば』

と一言を殘し、紫の雲に乘つて東の空を指して歸らせたまふた。二人は後姿を伏し拜み、感謝の涙に暮れつゝ、天の數歌を稱へながらテルモン山を指して歸り行く。

赤心を貫き通す桑の弓
屆かざらめや神の御國へ。

（大正一二、三、一六、舊、一、二九、於龍宮館、加藤明子錄）

第一二章　照門　颯（一四四二）

求道居士はケリナ姫を伴ひ乍ら、テルモン山の鬼國別の館を指して送り行く途々歌ひ出した。

求道『有爲轉變は世の習ひ　とは云ふもの、人の身の
行末こそは不思議なれ　三國一の月の國
ハルナの都に程近き　大國彦の現れませる
大雲山に立籠り　バラモン教の御教を
朝な夕なに信仰し　扳擢されてバラモンの
教司と任けられつ　追々功績を現はして

大黒主の御見出しに
尊き職を授けられ
嚮苑の館を屠らんと
鬼春別や久米彦の
旗鼓堂々と月の國
萬里の山野を跋渉し
浮木の森迄進軍し
隊伍を整へ河鹿山
治國別の言霊に
浮木の陣屋へ引返し

あづかり遂にカーネルの
神素盞嗚の現れませる
大黒主の命を受け
兩將軍に扈從して
後に眺めて進み行く
蹄の音も勇ましく
片彦、久米彦將軍と
進む折しも三五の
打破られて敗走し
又もや茲に全軍を
二つに分けてライオンの
ビクトル山の袂にて
ビクトリヤ城を脅かし
ゼネラル樣と諸共に
戰の庭に出で乍ら
慄ひ〳〵て廣野原
壁立つ如き坂道を
難攻不落の山寨に
構へて時を待つ内に
三五教に名も高き
廣き流れを相渡り
假の陣屋を造りつゝ
味方の軍勢に驚いて
總隊崩れ逃げ出ず
薄の穂にも怖ぢ恐れ
漸く渡りシメヂ坂
漸く下り猪倉の
永久的の陣營を
又も聞ゆる宣傳歌
神將軍と聞こたる

治國別の一行に
脆くも茲に兜扱ぎ
捨て忽ち三五の
變らせ玉ふ果敢なさよ
同じうせんとカーネルの
名も求道と改めて
靈を沈ひビクトルの
太しく立て、永久に
御前に日毎詣でつ、
三人の許しを受け乍ら

又も攻められゼネラルは
バラモン教の軍賊を
教の道のピュリタンと
吾等も倶に進退を
賊をば止めて修驗者
ビクの御國の清瀧に
下津岩根に宮柱
鎭まり居ます大神の
治道、道貫、素道居士
フサの國をば横斷し

猛獸毒蛇の荒ぶ野を
夜路の露をば浴び乍ら
來る折しも大空の
忽ち聞ゆる鳥の聲
たよりに傳ひ下る折
見逃がしならずと衣を脫ぎ
ザンブと許り飛込んで
上に救ひて耳元に
神の惠は忽ちに
三人は息を吹き返し

神の光を杖となし
エルシナ川の麓まで
月は漸く薄らぎて
川の水瀨のはやる音
淵に浮かんだ四人の姿
法螺を口に喰へつ、
四人の男女を空砂の
大法螺貝を吹立つる
シャール一人を除く外
やつと胸をば撫で下し

三人の男女に皇神の
大岩谷の麓まで
十字の秘法や數歌の
惡逆無道のベルの奴
早くも悟り惡心を
ヘルとベルとは初めより
八百長喧嘩を徐々と
ベルの司は逸早く
さはさり乍らヘルの奴
曇らせ吾等の後を追ひ
御教を完全に諭しつゝ
來りて息を休めつゝ
功力を傳へゐたる折
わが懐に金子ありと
起して奪らんと攻め來る
わが懐を狙ひつゝ
眞面目にやり出し
此場を後に逃げて行く
色と慾とに心をば
ケリナの姫を送らんと

草野を別けて進み來る
ポプラの蔭に立寄りて
又もや來る黑い影
ヘルと二人が言ひ合せ
來りしものと悟りしゆ
說き諭せども如何にせん
二人の靈は飽迄も
忽ち棍棒振り翳し
何かは以て耐るべき
夢路を辿る折もあれ
日も黃昏になりぬれば
息を休むる折もあれ
これぞ正しくベルの奴
吾が懐を狙はんと
いろ〳〵雜多と眞道を
地獄の境に墮ち果てし
惡の企みを遂げなんと
吾が腦天を打すゑぬ
忽ちウンと昏倒し
高天原の靈國を

頷有ぎ玉ふエンゼルが
吾等二人の危難をば
あゝ惟神　々々
受けたる吾々兩人は
撓まず屈せず道の爲
有らん限りを盡しつゝ
守らせ玉へ惟神
畏み〳〵願ぎ奉る
月は盈つとも虧くるとも
印度の海はあするとも
鳩の如くに下りまし
救ひ玉ひし有難さ
神の惠を目の當り
假令如何なる惱みにも
世人の爲めに眞心の
進まにやならぬ兩人を
皇大神の御前に
旭は照るとも曇るとも
星は天より落つるとも
此大恩は何時の世か

報ひ奉らで置くべきぞ
惠の露の天地に
草野の末に置く露も
宿し玉ひて瑠璃光の
あゝ天國か樂園か
進み行く身ぞ樂しけれ」

ケリナ

「わが足乳根の父母は
バラモン教の太柱
仁慈無限の御教を
大宮柱太知りて
思へば〳〵有難き
充ち足ひたる神の世は
一々月の御光を
如く光らせ玉ふなり
際限も無き廣野原
月の都に現れませる
大黒主の部下となり
テルモン山の山腹に
鎭まりゐます皇神に

朝な夕なに仕へつゝ
神の教に靡かせつ
ウラルの教の神司
得物を携さへ堂々と
其勢に辟易し
館を捨てゝテルモンの
暫し難をば避け玉ふ
鎌彦司が現はれて
現はし玉ひ攻め來る
一人も殘らず退けて
四方の國人悉く
教を開き玉ひしが
數多の手下を引率れて
勢猛く迫り來る
我が足乳根は逸早く
高嶺を渡り森林に
此時信者と現れませる
神變不思議の神力を
ウラルの教の司等を
難をば救ひ玉ひしゆ

我が足乳根は漸くに
神の教を詳細に
館の難を救ひたる
ラブし玉ひて朝夕に
妾は素より鎌彦に
度重なれば何時となく
遂には割なき仲となり
月夜を恨み暗の夜を
怪しき仲とはなりにけり
我が兩親は頭をば
元の館に歸りまし
開かせ玉ふ折もあれ
鎌彦司は妾をば
言ひより玉ひし果敢さよ
少しも心はなけれ共
男の情を慕ひ出し
父と母との目を忍び
指折り數へ待ち暮す
さはさり乍ら足乳根の
左右にふりて兩人が

戀を許させ玉ふ可き
夜陰に紛れて兩人は
エリシナ谷の山奥に
結びて暮す折もあれ
俄に駱駝を引つれて
何處ともなく出でましぬ
果實を喰ひ芋を掘り
悲しき月日を送ること
夫の便りは泣く許り
衣は破れ肉は痩せ
氣色なければ止むを得ず
手に手をとつて逃げ出し
形ばかりの草庵を
我が背の君の鎌彦は
妾を家に殘しつゝ
深山の奥に只一人
漸く餓を凌ぎつゝ
早一年に及べども
袖をぱ濡らす草の露
見る影も無き狀となり
淋しき浮世を果敢みて
庵を後に夜の道
佇み胸を押へつゝ
何處ともなく我が耳に
醜の曲津か知らね共
死ぬるより外に途無しと
千尋の底の青い淵
再び娑婆が戀しうなり
焦れ〳〵詮なし女の身
身も儘ならず悶え居る

冥途の旅を爲さんかと
エルシナ川の川岸に
少時思案に暮れけるが
死ねよ〳〵と敎へ來る
切迫詰つた此場合
心を定めて飛び込めば
息も苦しくなりければ
ま一度生命を保たんと
弊衣に水を含みしゆ
時しもあれや何物か

我が身に觸るゝ物〻りと
矢庭にしかと抱き付き
浮つ沈みつ爭へば
何時しか息は絶ゑ果てゝ
前後不覺となりにけり
斯ゝる處へヘル司
現はれ來り兩人を
救ひ助けて森林の
中に伴ひ勞りつ
種々雜多の介抱に
再び正氣に復しける
惡逆非道の一人は
妾の姿見るよりも
あやしき眼を光らせて
耳も汚るゝ口說言
三人の男は我が身をば
妻になさんと爭ひつ
バインの蔭に組みついて
組んづ轉んづ又元の
青淵目蒐けて落ち込みぬ

妾を救けし恩人の
生命を助けにやなるまいと
我が身を忘れて飛び込めば
又もや溺れて人心
無き身ここそはなりにけり
これより一行四人連
青野ケ原を打渡り
當途もなしに進み行く
忽ち關所に突き當り
容子を聞けば靈界の
八衢關所と聞きしより
吾等が一行驚いて
再び元の道をとり
歸らんとする折もあれ
酒に醉ふたる六さんが
又もや途中に塞がりて
何ぢやかんぢやと口說出す
こりや悩らんと思ふ折
向ふの方より足早に
走り來れる婆さんあり

一行五人は怪しんで　道の側への草原に
身を隠したる時もあれ　婆さんはッット立止り
不思議な手つきで招きつゝ　日出神の義理天上
底津岩根の太柱　みろくの神の生宮だ
これからお前等一同に　天國淨土の眞相を
諭してやるから跟いて來い　なぞと言葉も滑らかに
いと熱心に說きつける　何は兎もあれ行き見んと
婆さんの後に從ひて　川を隔てゝ岩山の
賤が伏屋に跟いて行く　ウラナイ敎の旗頭
高姫さんが住家ぞと　聞いて驚く胸の內

さあらぬ顏を裝ひて　樣子を伺ひ居たりしが
忽ち聞ゆる法螺の聲　三五敎の修驗者
求道居士が現はれて　吾等一同の危難をば
救はせ玉ふと見る內に　俄に聞ゆる水の音
小鳥の聲も爽かに　耳に入るよと見るうちに
再び息を吹返し　又もや救ひ上げられて
漸う此處迄歸りけり　あゝ惟神　々々
尊き神の御惠に　守らせ玉ひて道の上
包む隈なく足乳根の　居ますわが家へ速に
歸させ玉へ惟神　神の御前に願ぎ奉る」

と歌ひつゝ、求道居士の後に從つて、夜道を辿るのは、ケリナ姫であつた。

忽ち聞ゆる猛獸の唸り聲、前後左右より一齊に山彦を響かして聞ゑ來る。求道居士は天の數歌を歌ひ上げ、

眞觀清淨觀　廣大智慧觀
悲觀及慈觀　常願常瞻仰
無垢清淨光　慧日破諸闇
能伏災風火　普明照世間
悲體戒雷震　慈意妙大雲
澍甘露法雨　滅除煩惱燄
諍訟經官處　怖畏軍陣中
念彼觀音力　衆怨悉退散
妙音觀世音　梵音海潮音
勝彼世間音　是故須常念
念々勿生疑　觀世音淨聖
於苦惱死厄　能爲作依怙
具一切功德　慈眼視衆生
福聚海無量　是故應頂禮

と念じ乍ら、負ず劣らず、力一杯法螺貝を吹き立てた。法螺貝の聲は山野の邪氣を拂ふものである。ケリナ姫は猛獸の聲に戰慄し、求道居士の腰に喰ひつき、泣き聲になつて居士に從ひ經文を誦唱して居る。暫くにしてさしも激しき猛獸の唸り聲はピタリ

と止まつた。天を封じて居た雲は俄に散つて夏の月は洗ひ出した樣に、中天低く輝き始めた。是よりケリナ姫は何となく求道居士を尊信愛慕するの念益々深くなり、ハートに折々波を打たせ胸を焦すに至つた。

（大正一二、三、一六、舊一、二九、於龍宮館二階、外山豐二錄）

瑞月

汗しぼり働きて喰ふ米の飯
妻子と共に舌皷打つ

第一三章　不動瀧（一四四三）

テルモン山の峰續き
巨木茂れるスガの山
晝さへ暗く濛々と
霧立ち上る秘密郷
如くに見ゆる大瀧は
物凄じき水の音
轟く如く聞ゑ來る
夜な〳〵通ふ女あり

山一面に鬱蒼と
天を封じて谷間は
夏と冬との區別なく
天より布を晒したる
アン、フラック瀧といひ
百の雷一時に
かゝる所へスタ〳〵と
バラモン教の神司

テルモン山に館をば　築きて教を開き居る
鬼國別の愛娘　デビスの姫は我父の
重き病を救はんと　一人の妹に別れたる
其悲しさに身を忘れ　父の病や妹の
無事を祈りて進み來る　月は御空に皎々と
輝き亘り下界をば　隈なく照し玉へども
此瀧のみは老木の　枝に影をば遮られ
只瀧水のうす白く　我目にとまる許りなり
デビスの姫は忽ちに　衣脱ぎすて、瀧壺に
ザンブと許り飛込んで　一心不亂にバラモンの
呪文を稱へ祈り居る　其心根ぞ殊勝なれ
かゝる所へスタ〳〵と　慌てふためき走り來る
怪しの影は只二つ　足音忍ばせ忍び寄り
暗に浮出た白い肌　眺めて互に囁きつ
デビスの姫が瀧壺を　あがり來るを待ちにける
これぞベル、ヘル兩人が　月照彦の神靈の
御稜威に恐れ修驗者　ケリナの姫を振棄て、
命カラ〴〵逃げ來る　其道すがら何氣なく
谷の水音たよりにて　尋ね來りし物ぞかし。
スガ山の谷間は此界隈にても目立つて大木の繁茂せる、餘り高からざる密林であつ

て、二十丈三十丈と幹のまわつた大木が天を封じ、晝さへ暗き凄い樣な場所である。そしてテルモン山の谷水を一切こゝに集めて大瀑布をなし、高さ數百丈に及び、白布を天から吊り下した樣になつてゐる。此地點は殺生禁斷の場所であり、アン、フラック明王が瀧の傍に祀られてある。されど國人は怖れて此瀧壺に近よつた者はない。種々雜多の猛獸や蛇などが澤山に棲息し、一歩たり共、スガ山の森林へ足を踏み入れたる者は生きて歸つた者は無いと云つて怖れられてゐた。雨傘を擴げた樣な蝙蝠が瀧の近邊を眞黑になつてバタ〳〵と飛び交ひ、晝は大木の朽穴に身を隱し、日の暮頃から、ソロ〳〵活動し始めるのである。

デビス姫は淨行の家に生れた淑女なるにも關らず、自分の命を的に夜な〳〵通ひ來つて、老病に苦む父の全快を祈り、且三歲前に妾を隱した妹ケリナ姫の無事に歸り來らん事を、アン、フラック明王の前に祈るべく、危險を冒し、夜な〳〵通ひ來り、深い瀧壺に身を投じて荒行をやつてゐたのである。そこへ求道居士、ケリナ姫を撲り殺して姿を隱さうとしてゐる矢先、天の一方より大火光となつて、月照彥神のエンゼル現はれ來り、求道居士、ケリナ姫を甦らせ玉うた。ベル、ヘルの兩人は此火團の爆發した音に肝を潰し、スガ山の谷間の恐ろしい事は承知し乍らも、餘りの驚きに逃げ場を失ひ、山を駈け登つて、此瀧の麓に漸く辿ひて來たのである。瀧水の音は轟々と騷がしく、デビス姫の祈る聲も聞き取る事が出來なかつた。

ベル、ヘルの兩人は斯かる深林に夜中、纖弱き女が荒行に來て居るとは思ひもよらないので、不審に堪へやらず、若や妖怪にはあらざるかと、齒の根をガタ〳〵させ乍ら、瀧の近くへ寄つたものゝ、氣味惡く互に抱きついて慄うてゐた。

デビス姫は一生懸命に祈願をしてゐたので、二人の男が近くに來て居る事は夢にも知らず、濡れた體の水氣を拭き取り、立派な衣類と着替へて、馴た道をスタ〳〵と歸つて行く。怖い物見たさの喩に洩れず兩人は、跡を慕うて十間許り距離を保ち跟いて行つた。女は漸くにして月の照り亘る野原に出た。此處には天拜石と云つて、一間四方許りの長方形の削つた樣な天然岩がある。デビス姫は其岩の眞中にキチンと坐り、再び祈願を籠めた。ベル、ヘルの兩人は腰を屈め、茫々たる草原を潜り乍ら、ソッと傍に寄り草の茂味に身を隱して樣子を考へてゐた。

デビス姫は月光に向つて双手を合せ祈り初めた。

デビス　「南無大自在天バラモン大神樣、私は丁度今日にて三七廿一日の荒行を無事に了りました。何卒々々大黒主の神司より父が預かりました如意寶珠の玉が、一日も早く發見されまして、大黒主樣の御勘氣が許されまする樣に、又父は妹の行衛不明となりしより、心配を致し、それが爲めに重き病の床に臥し、命旦夕に迫つて居りまする。何卒私の心を憐み下さいまして、父の病を全快させ、戀しき妹に會はして下さいませ。そして如意寶珠の神寶が、一時も早く館へ、何者かの手を經て還つて參ります樣に、御惠を垂れ玉はんことを、偏に御願申奉ります。月の大神樣の御姿を拜するにつけ、其圓滿なるお姿にも等しき如意寶珠の神寶の思ひ出されて參ります。あの神寶が無き時は、テルモン山の神館は暗夜も同樣で厶います。何卒〳〵私の命はお召取になつても構ひませんから、何卒此三つの願はお聞き屆け下さいます樣……」

と一心不亂に祈願を籠めてゐる。ベル、ヘルの兩人は始めて此女の素性を聞知り、胸

を撫で下し、又もやソロ〳〵横着心を起し、女を赤裸にして多少の財産を手に入れんと考へ込んだ。デビスの頭や體には金剛石や珊瑚珠、瑠璃、瑪瑙、硨磲等の寶玉が飾られ、折柄の月光に映じて花の如く光つてゐる。之を眺めた兩人は猫に松魚節を見せたやうに、喉をゴロ〳〵ならし、よき獲物ムんなれと耳に口を寄せ、

ベル「オイ、ヘル、素的滅法界なナイスぢやないか。そしてあの頭から體に光つてゐる寶石は隨分高價な物だらうよ。こゝで一つ惡の仕納めに、彼奴を赤裸にして、持物一切を奪ひ取り、それを持つて國許へ歸り、故郷へ錦を飾らうぢやないか。そうすればバラモン軍が解散になり、お拂ひ箱になつたと笑はれる事もあるまい。人間はどうでもよい、成功さへすれば人が褒めるのだからなア。こんな好い機會は又とあるまいぞ」

ヘル「どうも何だか、體がビリ〳〵と動き出して來た。俺やモウ泥坊は廢業する。何程高價な物でも欲しくはないワ。頭の上から皎々たる月の大神が、吾々の行動を看視してゐられるやうに思へて、怖ろしくなつて來たよ。お前欲しけら、あのナイスに事情をあけて、賴んで貰つたら如何だ」

ベル「エー、腰抜だなア。そうだから惚泥と云はれるのだ。そんなら汝、こゝで俺の腕前を拜見してゐよ、其代りに、俺が奪つたら一つも汝に分配せんから、承知だらうな」

ヘル「ウン承知だ、併しベル、餘程考へてやらないと、ぞんな目に會ふか知れんぞ。ぞこともなしに彼奴の體から御光がさして居るぢやないか、俺やどうしても神さんのやうに思はれて、體がすくむ樣だ」

ベル『光つてゐるのが價値だ。彼奴をスッカリ手に入れやうものなら、何十萬兩とも知れぬ價値の物だ。汝は餘程可い腰抜けだなア。目の前にブラ下つてる寶を見す〳〵見捨るのか。冥加知らず奴、そんなら、そこに少時蝮のやうに蟄伏して居れ』

と言ひ乍ら、ッカ〳〵とデビス姫の祈願してる前に立現はれ、

ベル『オイ、どこの女中か知らぬが、長の旅を致す内、盗賊に出會ひ、有金をスッカリと奪ひ取られ、今は是非なく乞食の樣になつて道中をしてゐるのだ。之から月の國迄歸らなくてはならない。どうかお前の頭に光つてゐる物を二つ三ッつ此方へ渡して下さるまいか』

デビスは此聲に驚いて、祈願の手をやめ、日影によく〳〵透して見れば、荒くれ男が一人、自分の坐つてゐる少し横手に立塞がつてゐる。

デビス『お前さんはどこの旅人か知らぬが、今私の頭の物をくれと云つたやうだが、之は何うしても上げる譯には行きません。體中に寶石をつけてゐるのは、惡魔を防ぐ禁厭ですから、まだ之から我家へ歸るのには、一寸二里許りも道程がある。夜の道を歸るのは危險だから、たつて欲しいのなれば更めて來て下さい。私の家はテルモン山の神館でムいます』

ベル『ナニッ、お前はあのテルモン山の靈地鬼國別樣の娘といふのか、ヤアそりや妙な緣だ。拙者は斯う見ててもバラモン軍の征夷大將軍鬼春別將軍でムるぞ』

デビス『ホ、、、鬼春別將軍さんは澤山の軍隊を伴れて堂々とお出で遊ばすぢやありませんか。最前何と云ひました……長途の旅、泥坊に出會ひ、金をスッカリ奪られたから頭の物でもくれい……と云つたでせう。鬼春別ともあらう方が、只一人歩い

たり、賊に持物を奪られたりする様な事がありませうか。お前さんは胡麻の蠅だらう。サア、奪るなら奪つて御覽、女乍らも腕に覺がありますぞや」

ベル「實の所は鬼春別に間違ひは無いのだ。三五教の軍勢十萬騎を以て我陣屋へ押寄せ來り、味方は僅に三千餘騎、それも大部分は脚氣を患ひ、殆んど戰場に立つ者は二三百人許り、如何に勇猛なる鬼春別も僅に三百の手兵を以て十万の敵に對するのだから、天地の道理上、已むを得ず味方は殘らず討死し、自分は神の助けによつて、漸く命を助かり、此處まで落伸びて來たのだ。鬼春別に間違ひはムらぬぞや」

デビス「鬼春別樣に間違ひなければ、何卒妾の舘迄來て下さいませ、自分の體につけてる寶石位は物の數でもムいません。諸方から貢いで來た種々の寶物は山程ムいますから、そして又父も鬼春別樣がお出になれば喜ぶ事でせう。何卒私と一緒に來て貰ひたいものですな」

と僞者とは知り乍ら、ワザと氣を引いて見た。そしてデビスは自分の舘近くに行つた時に、部下に命じて此泥坊を捕縛し、懲しめて改心させんと刹那に考へた。ベルは舘へ行つては直樣バケが現はれると思ひ、燒糞になり、

ベル「エー、實の所は天下晴れての泥坊樣だ。サアこゝで何もかもお前の體に附着してゐる物は受取らう。ゴテ〳〵申すと大切な命迄奪つて了ふが何うだ」

ヘルは思はず知らず草の中から、

ヘル「オイ、ベル、そんな無茶な事云ふない。それ程欲しけりや一つ丈頂戴したらどうだ」

と呼んでゐる。ベルはハッとし乍ら、

「アハン〳〵」

と大きな咳拂に紛らし、ヘルの聲を消さうとした。デビスは早くもまだ外に一人の卑怯な泥坊が潜んでゐる事を悟つた。

デビス「ホッホ、、、、腰抜泥坊だこと、一つ丈頂戴せいなどと、何した情ないシミッタレた事をいふのだらう。命が欲しけりや命もやらう。寶石が欲しければ與らん事もない。併し乍ら此方も生物だから、チット計り動きますから、跳飛ばされんやうになさいませや」

ベル「エー、モウ駄目だ。コラ、ヘルの奴、汝もやつて來んかい。戰利品は山分けだ」

ヘル「俺モウそんな殺生な事はしたくないワ、又天から光つて來たら何うする。ダイヤモンドでも何でも、俺モウ光るものには懲々だ」

デビス「ホ、、、、腰の弱い泥坊許り集つたものだなア。併し乍ら其處邊に慄つてる腰抜泥坊、お前は可愛相な奴だ。こんな奴にやるのは惜いが、お前になら寶石もやらうし、體が欲しけら體も任してやるから、そんな草原に螽斯の如うにスッ込んでをらずに、トットと此處へ出て來なさい」

ヘルは大膽不敵の女の言葉に度肝を脱かれ、腰をぬかしてバタリと平太つたまゝ慄うてゐる。

ベル「エー、腰抜奴、氣の弱い事許りぬかしやがつて、助けになる所か商賣の邪魔許りする奴だ。タカが女の一人、何程手が利いてると云つても知れたものだ。オイ女、渡すのが厭なら俺が直接に奪つてやる、神妙にしろ」

と云ひ乍ら猿臂を伸ばして、頭に光る寶石をグッと掴みかけた。デビスは其手をグッ

と握り、日頃鍛ねし柔術の手を以て、三間許り草つ原へ投げ付けた。ベルは死武者になつて、女に喰ひつき喉を締めやうとした。ベルも少し許り手は利いてゐたが、到底デビスには敵はない、併し乍ら寶石に眼眩んで、自分の危い事も忘れ、一生懸命に放られては組み付き〳〵、殆んど十二三回も投げられ、グタ〳〵になつた。それでもまだ性懲もなく、頭や體の寶石の光を目當に喰ひつく。デビスは『エー面倒』と岩を飛下り、武者振りつく。ベルの胸倉をグッと取り、息を詰めた。ベルは手足を藻掻きヂタバタとやつてゐる。流石のヘルも何時迄戰慄して草の中に伏艇してる譯にも行かず、傍に落ちてゐた半朽ちたる棒杭が月に照らされて光つてゐるのを見つけ出し、デビスがベルの首を締めてゐる背後から、腦天目蒐けて、力一杯打下した。手許外れて耳から横つ面をウンと云ふ程撲りつけた。慾やデビスはアッと一聲叫んで脆くも其場に倒れて了つた。夜嵐は遠慮會釋もなく音を立て、通つて行く。

（大正一二、三、一七、於龍宮館、松村眞澄錄）

瑞月

米かひて父が歸るを待ち詫びつ
涙ながらに眠るいとし兒

三錢の稲荷酢をば嬉しげに
寢床にて喰ふ我兒いぢらし

第一四章　方

岩（一四四四）

ヘルは月影にベルの姿をよく〳〵見れば、目を眩してゐる。幸ひ傍に小さい水だまりがあつてそれに月が光つてるのを認め、口に水を含み來り、ベルの面や口などに幾回となく含ませた。漸くにして息を吹返し、四邊をキョロ〳〵見廻し乍ら、

ベル「あ――、一体此處はどこだ。エライ所へ行つて來た」

と不思議相にヘルの面を覗き込んでゐる。ヘルは聲を勵まして、

ヘル「オイ、ベル、確りせんか、汝今、ナイスに喉を締められ、目を眩してゐやがつたのだ。俺が今いろ〳〵と介抱して助けてやつたのだ。サア、早く立たんか、何時追手が來るか知れないぞ。此處は夜とはいへど通路だ、サア、確りした〳〵」

と背中をポン〳〵叩いてゐる。

ベル「あゝ矢張り夢だつたか、エライ所へ俺は行つて居つた。澤山な赤や青の鬼が鐵棒持つて四方八方より俺を追かけて來る其苦しさ、まア夢でよかつた。併しあのナイスは何うなつたか、取逃がしただらうな」

ヘル「ナニ、汝が喉を締められヂタバタやつてるのを見るに見かねて、後から棒千切れでボンとやつた所、脆くも倒れよつたのだ。それみよ、そこに倒れてるだないか」

ベルはダイヤモンドの光を見るより早く、

「ヤッ」

と云つたきり、猿臂を伸ばして頭の飾をむしり取り、矢庭に懐に捻込むだ。ヘルは

ヘル「エー、毒をくはゞ皿までだ。人殺の大罪を犯したのだから寶石を盗んでも矢張り

同じ事だ。同じ罪になるのなら、之でも奪つて太く短く暮さうかい」

ベル「アハ、、、、脆いものだな、併し之丈澤山な寶石を體につけやがつて、實に贅澤な者ぢやないか、今日の貴族生活をしてる奴は皆是だからのう、下の人間が苦むのも無理はないワイ。俺達は此寶石をどつかの町へ持つて行つて賣とばし、罪亡ぼしに天下の貧民を與ふ限り助けてやらうぢやないか。そすりや人の一人位殺したつて萬民を助けるのだから、大罪所か却て天から御褒美を頂くかも知れないぞ」

ヘル「天から御褒美を頂くことは到底望まれないとしても、せめて罪を輕うしてもらふ事は出來るだらう。兎も角汝の持つてゐる寶石を皆俺に渡せ、汝に持たしておくと又愛我心を起しよつて、貧民救濟に用ゐないかも知れない。俺に持たしておけば此寶を善用して、汝の罪も輕くなり俺の罪も輕くなるやうにしてやるからな」

ベル「馬鹿云ふな、汝のやうな風が吹いても慄うてるやうな人間に持たしておくのは險呑だ、剛膽不敵の俺のやうな人間の懷に持つてをれば、如何なる惡魔も狙ふこた出來ない、サア、スッパリこちらへ渡せ」

ヘル「馬鹿云ふない、俺が助けてやらなかつたら汝は此世に生きてるこた出來んのだ。そんな執着心はやめて、皆俺に渡すのだ」

ベル「汝はそんな態のよい事をいつて、俺から寶石を奪ひ取り、一人で猫婆をきめこむ積りだらう。今日の奴は慈善會だとか、或は孤兒院だとかぬかして金を集め、皆自分の懷中を肥す奴許りだ。一旦泥坊に成り下つた人足が、慈善なんか夢にもあり相な事はないワイ。そんな僞善者に寶を持たしておくと、天下の寶を惡用するから、

スッパリ俺に渡せ』

ヘル『何を吐しやがるのだい、汝も泥坊ぢやないか、俺に渡すのが險呑なら、汝に渡すのも險呑だ。サア、早く出さんかい』

ベル『ヘン、一旦懐へ捻ぢ込んだ以上はメッタに渡さないぞ。第一黄金や寶石は此ベルさんのテースト物だから、假令命が亡くなつても渡す氣遣ひがないワ、グズ〳〵ぬかすと、汝の命も取つてやらうか、そすれば全部俺の懐へ這入るのだからなア』

ヘル『何猪口才な、美事取るなら取つてみよ、俺も汝の命を取つて、此寶石を全部私有物となし、ハルナの都へ歸つて、天晴れ紳士となる積だ。そして多額納税議員にでもなつて巾を利かす積だ。臺泥でさへも衆議院議員に當選した例があるぢやないか。渴しても盗泉の水を呑まずとは、昔の奴のぼざく言葉だ。俺は之から逐鹿場裡に立つて、此金を撒き散らし、社會の優者となる考へだから、其第一着手として汝の所持品をスッカリ取つてやるのだ。汝の物を奪つた所で別に罪にもなるまい。又命を取つた所で元々だ。汝の死んでる所を助けたのだから……』

ベル『コラ、汝は寶をみると俄に噪ぎやがるのだ。汝は已に改心したと云つたぢやないか』

ヘル『きまつた事だい、つまらん時には誰だつて改心するが、寶を見て改心する奴があるかい。サア腕づくで之から奪り合だ』

ベル『ヨーシ、面白い、見事取つてみせう』

と兩方から四股を踏み、手に唾し乍ら、辻相撲を取るやうな調子で、四つにからみ、組んづ組まれつ轉げ廻る。互に固い爪で目をひつかく、鼻を削る、手も足も面も血達

摩の樣になつて格闘を始め双方共、グニャ〳〵になり半死半生の態で、其場にドッカと倒れて了つた。

宣傳歌の聲は夜嵐につれて、千切れ〳〵に遠く聞えて來る、之は求道居士、ケリナ姫が夜道を急ぎ此方に向つて行進しつゝ歌ふ聲であつた。

求道『神が表に現はれて　善神邪神を立分ける
此世を造りし神直日　心も廣き大直日
只何事も人の世は　直日に見直せ聞直せ
世の過は宜り直せ　こゝは名に負ふフサの國
御空に高く月照の　彦命はキラ〳〵と
輝き玉ひ吾々が　淋しき野路を歸りゆく
行手を照させ玉ふなり
三五數を守ります
珍の司と現れませる
彦命の御神德
吾等二人の危難をば
天つ御空に輝きつ
バラモン教のカーネルと
鬼春別や久米彦の
山野を渡り河を越に
髪梳ずりやうやくに
あゝ惟神々々
高天原の靈國の
稜威も殊に大八洲
忽ち下り來りまし
救はせ玉ひ久方の
歸り玉ひし尊さよ
選ばれハルナを立出でて
兩將軍に從ひつ
雨には浴し荒風に
河鹿峠の麓まで

旗鼓堂々と進みゆく
善をば助け惡神を
率ゆる軍は悉く
打亡ぼされ這々の
浮木の森やビクトリヤ
豫定の退却始め出し
堅磐常磐の岩窟に
又もや來る宣傳使
誠の道を諭されて
黎明告ぐる鷄の聲

至善至愛の大神は
懲め玉ふか吾々の
治國別の言靈に
態にて脆くも敗走し
猪倉山にチク〳〵と
三千餘騎を從へて
千代の固めと立籠もる
治國別の一行に
曇りし胸も漸くに
旭の豐榮昇る如

靈もあかくなりにけり
久米彦スバール兩司
歸順されたる不思議さに
バラモン教の御教は
不言實行と知りしより
掌の裏返す藤堂式
鋒を向けたる果敢さよ
誠に敵する事を得ず
言ひ譯立たずと意を決し
たるを憚り中間の

鬼春別を初とし
手もなく神の正道に
我も心を飜し
げに美はしき道なれど
すまぬ事とは知り乍ら
忽ち昧方の軍隊に
さはさり乍ら天地の
大黑主の神樣に
三五教の宣傳使
法螺吹立てる修驗者

墨の衣に身を纏ひ
百の罪をば消滅し
誠を盡し奉らんと
百日百夜の荒行を
山にまします大神に
ゼネラル樣の許しをば
漸く旅路につきにけり
スタ〳〵來り谷底を
渦まく淵に浮びゐる
見逃しならぬ修驗者
頭を聞く剃りこぼち
天地の神に三五の
照國山の谷間に
勤めて遂にビクトルの
朝な夕なに仕へつゝ
豪り茲に宣傳の
エルシナ川の畔迄
見下す途端に訝かしや
四人のコロブス見るよりも
神に祈りて助けんと

危き路を谷底に
命を助け喜びて
ここ迄進み來りけり
惱みに會ひて玉の緒の
月の光に助けられ
心勇んでテルモンの
宮居をさして進みゆく
あゝ惟神〳〵々
教の露の何處までも
降らさせ玉へ月照の

降りてやう〳〵三人が
荒野ケ原を打わたり
道の行手に諸々の
命も危き所をば
ケリナの姫と諸共に
山に現れます大神の
吾身の上ぞたのもしき
神の惠のいや深く
青人草の身の上に
皇大神の御前に

赤心籠めて願ぎまつる　あゝ惟神々々
御霊幸ひましませよ」

ケリナ姫は優しき聲を張上げて又もや歌ひつゝ進み來る。

ケリナ　「天津日かげは西山に　傾き玉ひ東の
草野を分けて昇ります　月照彦の御光は
草葉の露に悉く　宿らせ玉ひて吾々が
行手の道を守ります　野山の猛き獣や
いと恐ろしき毒虫も　神の惠に抱かれし
吾身を害ふ事ならず　先を爭ひ逃げ出し
吾等は無事にテルモンの　父の舘に久々に
歸りゆく身となりにけり
變らせ玉ふ事もなく
いと忠實に仕へますか
いかに此世を果敢みて
妾が今宵歸りなば
戀しき姉の君迄も
吾生命を救ひたる
厚く待遇し玉ふべし
戀の迷ひの夢も醒め
夏の夜路を歸りゆく

方岩　吾足乳根の父母は
神の御前に朝夕に
戀しき姉のデビス姫
暮させ玉ふことならん
父と母とはいふも更
必ず喜び迎へ入れ
エミシの君を尊みて
思へば〳〵有難や
心を月に照らしつゝ
吾身の上ぞ樂しけれ

あゝ惟神　々々　御靈幸ひましませよ
旭は照るとも曇るとも　月は盈つ共虧くる共
假令大地は沈む共　星は空より墜つる共
吾身を救ひ玉ひたる　三五教の大御神
求道居士が師の君の　惠はいかで忘るまじ
命の親の師の君と　手を携へて行く野路は
如何なる曲の現はれて　行手にさやる事あるも
いかでか恐れん惟神　尊き神の御守りに
いと安々と歸りゆく　あゝ惟神　々々
御靈幸ひ玉へかし」

と歌ひつゝ、方岩の間近に歸つて來た。

求道居士はケリナ姫と共に漸く方岩の傍に着いた。草の中にウン〳〵と怪しい聲が聞こえて來るのでツと立止まり、よく〳〵見れば何者か半死半生の態で呻吟いてゐる

求道「ハテナ。二三人の人間が斯樣な所で倒れてゐるやうだ。大方最前のベル、ヘル如き惡人に金を奪はれた上、切られて苦んでゐるのだらう、何は兎もあれ、此儘見逃して通る譯には行かぬ、ケリナさん、貴女は此岩に腰かけて待つてゐて下さい。一寸査べてみますから……」

ケリナ「ハイ、妾何だか、氣にかゝつてなりませんワ、私の姉さんぢやムいますまいかな。先づ第一女の方から査べて下さいませ。此衣類から考へますれば女らしうムいます」

求道は月にピカ〳〵光つてゐる衣裝を目當に近よつて見れば、耳から多量の血糊を出し、妙齡の女が倒れてゐた。

求道『あゝこれはどこかの貴婦人だ。一通の家の娘ではないやうだ。コレ、ケリナさん一寸來て御覽。此衣裝と云ひ、どうも淨行の孃さんらしうムいますよ』

ケリナはハッと胸を轟かし乍ら、側近く寄添ひ、よく〳〵顏をみれば、擬ふ方なき姉のデビスであつた。ケリナは見るよりアッと許りに仰天し、其場に倒れて了つた。

求道居士は驚いて、四邊に光る水を掬ひ、先づ第一にケリナの面部に注ぎ漸くにして呼生け、へタ〳〵になつてゐる姫を方岩の上に運びおき、自分の蓑を布いて、其上に寢させ、デビスの介抱にかゝつた。デビスはウンと息吹返し、四邊を見まはし乍ら修驗者の姿を、不思議相に凝視てゐる。求道はヤッと安心して、

求道『モシ〳〵、貴女はテルモン山の神舘に坐します鬼國別樣のお孃さんぢやムいませんか。拙者は三五教の修驗者エミシでムいます。決して惡い者ぢやムいませんから御安心なさいませ』

デビスは此言葉を聞いて安心し、頭部の痛みを抑へ乍ら、

デビス『どうも危い所をお助け下さいまして、此御恩は海山にも譬へ難う存じます。惡者に出會し、頭部を擲りつけられ、氣が遠くなつて居りました。貴方樣が御通り下さらなかつたら、妾は最早千秋の恨を呑んで此世を去つたに違ひありません、どうも有難うムいました。あゝバラモン大神樣、よくマア助けて下さいました。惟神霊幸はひませ』

と合掌してゐる。ケリナ姫は姉のデビスと聞いて嬉しさに堪へず、方岩から下り來つ

て、デビスの手を執り、涙の聲を絞り乍ら、

ケリナ　『姉上様、お懷しう存じます、私は妹のケリナでムいます。御兩親様や姉上様に御心配をかけまして誠に申譯がムいませぬ。何卒お許し下さいませ。そして御兩親は御無事でゐられますかな』

と疊みかけて問ひかけた。デビス姫は頭がフラ〳〵とゝもすれば氣が遠くなり行くのをキッと氣を張りつめて、妹の手を握り、

デビス　『あゝ戀しき妹であつたか、不思議な所で會ひました。ようマア無事でゐて下さいました。モウ之で私は命が亡くなつても、あなたの顏さへ見れば得心でムいます』

ケリナ　『お姉様、氣を確に持つて下さいませ。そんな心細い事を云はない様に賴みます。さぞエライお怪我でお苦しうムいませうが之から私が館へ歸り、心限りの御介抱を申上げますから御安心なさいませ。キッと神様の御神德で御全快なさいますからな。貴方は今此修驗者に助けられたのですよ。私も此お方に命を助けられ、今送つて戴いて、御兩親の館へ歸る途中でムいます。どうしてマアこんな慘酷しい目にお會ひなさつたのでムいますか』

デビス　『實の所は大黑主様のお實、如意寶珠の神寶が紛失致しまして、それが爲に父上は大變な御心配を遊ばし、病氣に取りつかれ、御老体の事とて、日に〳〵病は重る許り、そこへあなたの行方が分らなくなつたものですから、益々御心配を遊ばし……私はとても命は長持てはせないが、せめて生前にケリナに一目會うて死にたいものだ……とお歎き遊ばすので、私は立つてもゐてもをれなくなり、今日で三七廿一日の間

國人が恐れて晝さへも、よう近づかない、魔の山と稱へられてゐるスガの山の森林に通ひ、アン、ブラックの瀧にかゝつて、荒行をすませ、今日は行のあがりで、此處迄やつと歸り、方岩の上で滿願の御禮や祈願を籠めてゐる最中二人の惡者が現はれて、こんな目にあはしたのでムいますよ。あゝ修驗者樣のお蔭、妹が助けられ、私迄が助けられたとは、何たる深い因緣でムいませう。修驗者樣誠に有難うムいます。茅屋なれど、我館へお越し下さいまして、緩り御逗留下さいませ。定めて兩親は申すに及ばず、數多の役員や信者も喜ぶことでムいませう」

求道「ハイ有難うムいます、申上げたい事は海山ムいますが、貴女は大變な御負傷をしてゐられますから、お氣を揉ませ、種々の事を聞かせては、却てお障になりますから御全快の後緩りと申上げます。何卒氣を緩りと落着けて下さいませ」

デビス「ハイ有難うムいます、何分宜しうお願申ます」

ケリナ「お姉さん、あなたを苦めた奴は此處に倒れてゐる兩人ではムいませんか」

此言葉にデビス姫は後振返りみれば、以前の惡者が二人大の字になつて唸つてゐるデビス「あゝ此賊でムいます。鬼春別將軍だと法螺を吹いて居りましたが、どうで碌な奴ぢやムいますまい」

此言葉に求道居士はハッと胸を躍らせ、眞青な顏をし乍ら、

求道「ハテさて淺ましい事だ、ゼネラル樣は又もや邪道に逆轉遊ばしたのかなア。何した惡魔が魅入れたのだらう。何は兎もあれ、實否を査べてみやう」

と心に囁き乍ら、よく〳〵見れば、以前のベル、ヘルの兩人であつた。

求道「あゝ此奴は、ケリナさん、最前吾々を殺さうとしたベル、ヘルの兩人です。テも

さても困つた奴ですなア」

ケリナ「何と呆れた者ですなア。併し何程惡人だとて、此儘放つておけば死んで了ひますから、助けておやりなさいますでせうなア」

求道「尤もです、何程惡人でも見捨て、行く譯には行きません。吾々が惡人か、此男が惡人か、到底人間では分りません、仁慈の神樣は吾々の心を矯直さんと、此等兩人をお使ひ遊ばし、お前の心は此やうなものだとお示しになつてるのかも知れません此等兩人を使つて、吾々に苦集滅道の眞諦をお示しになつたのかも知れません。そうすれば此兩人は吾々の絶好唯一のお師匠樣と思はねばなりません。あゝ惟神靈幸倍坐世」

と水をくゝんで、兩人の介抱を懇切にやつてゐる。漸くにして二人は氣がついて起き上り、血みどろの體を曝して、求道の前に兩手を突き自分の不都合を涙と共に謝罪した求道は二人の心を憐れみ、力限りに祈願を籠め、懷より、照國山の溪間にて採取したる石綿を取出し、血糊を拭ひ取り天の數歌を二三回繰返した。ヘルは涙を流し乍らヘル「貴方は求道樣でムいましたか。命を助けて頂き乍ら、自我心の慾にからまれ、こんな不心得な事を致しました。之は姫樣の衣裝からほつたくつた寶玉でムいます。スッパリお返し申します。何卒之をお受取り下さいませ」

と懷から差出すを、ベルは目敏く眺め、横合からグッと奪ひ取り懷に捻ぢ込み、足をチガ〳〵させ、丈餘も伸びた草の中に身を隱し、何處ともなく消ゑて了つた。求道居士はヘルの脊中にデビス姫を負はせ、神言を奏上し乍らケリナと共に後先になつて、月夜の露路を踏み分け、テルモン山の神館を指して歸り行く事となつた。

（大正一二、三、一七、舊二、一、於龍宮館、松村眞澄錄）

瑞　月

森嚴と神祕に富める三五教
詩的佛教も眞髓等し
全心を頭陀袋とし人々の
言の葉貫ひ歩行くは文士
世の人の言葉を胸に貯へて
まさかの時に使へ宣傳使

第四篇　三五開道

第一五章　猫

三千彦『嚴の御靈と現れませる
瑞の御靈と現れませる
珍の御水火に現れませる
埴安彦や埴安の
天地百の神人の
清き聖場に救はんと
神素盞嗚の大神に
茲に瑞の大神は

背（一四四五）

高皇産靈の大御神
神皇産靈の大御神
三五教の大神は
姫命を世に降し
靈を淨め天國の
心を配らせ玉ひつゝ
其神業を任け玉ひ
神漏岐神漏美二柱

神の御言を天地に
世を平けく安らけく
日出の守護に復さんと
豐葦原の中津國
殘る隈なく巡らせて
擴充せしめ玉ひけり
曲のすさびにつけ入りて
入岐大蛇や醜狐
治むる國の司人
憑りて所在曲わざを
麻柱奉り常暗の
治めて松の御世となし
百の司を養成し
國の八十國八十の島
天國淨土の福音を
天足の彦や胞塲姫の
此世を案す曲津神
曲鬼共は天の下
其外百の人々に
縱横無盡に敢行し

日に夜に世界を汚し行く
齋苑の館の宣傳使
神の教を四方の國
思ひは胸に三千彦が
廣野の中に日をくらし
暗路を辿る折柄に
幾百人とも限りなく
三五教の宣傳使
吾一行の身邊を
劍をかざし石を投げ
醜のすさびぞうたてけれ
玉國別の弟子となり
傳へんものと眞心の
ライオン河を渡りてゆ
止むなく眠る露の宿
バラモン教の落武者が
手に手に兇器を携へて
鏖殺せんといきり立ち
十重や二十重に取圍み
勢猛く攻め來る

玉國別の師の君や
力限りに打出して
敵の突出す槍先に
其場にドッと倒れ伏す
伊太彦小脇にかい込んで
何處ともなく逃げ行きぬ
取圍まれて何處となく
後に殘りし三千彦は
詮術もなき悲しさに
突破し乍ら漸くに
眞純の彦は言靈を
防戰したる折もあれ
股をさゝれて伊太彦が
見るより驚き眞純彦
敵の重圍を切りぬけつ
吾師の君も大勢に
姿を隱し玉ひける
俄に言靈澁りきて
命カラ〳〵圍をば
我師の跡を尋ねつゝ

此處迄進み來りけり
尊き神の御守
神に受けたる使命をば
惠の露を賜へかし
伊太彦司の槍劍は
深手に惱み山奥に
聞かまほしやと思へ共
神に伺ふ由もなく
バラモン教の籠もりたる
知らず〳〵に着きにけり
あゝ惟神〳〵々々
我師の上に顯れまして
完全に委曲に果すべく
眞純の彦は今何處
最早癒らしか或は又
隱れて病を養ふか
曇りし靈の吾々は
道の行手を氣遣ひつ
テルモン山の近く迄
油斷のならぬ敵の前

企みの穴の陷穽　　數多拵へ三五の
　　手具脛ひいて待つと聞く
教司の來るをば　　尊き神の御前に
　　あゝ惟神々々　　吾等一行の幸運を
　　吾師の君を始めとし
　　謹み敬ひ願ぎまつる」

と密々唄ひ乍ら、テルモン山より流れ落つるアン、ブラック河の川邊に着いた。頃しも夏の半にて半圓の月は西天にかゝり、利鎌のやうな鋭い光を投げてゐる。三千彦は日の暮れたのを幸、川堤に腰をおろし、小聲になつて天津祝詞を奏上し、終つて獨り言、

三千「あゝ、水の流れと人の行末、變れば變るものだなア。玉國別の師の君のお伴をなし、去年の冬齋苑の館を立出でゝより、浮つ沈みつつ、種々雜多の艱難苦勞、其中にも我師の君は、懷谷に於て猿に眼を破られ玉ひ、止むを得ず祠の森に立て籠り、御神勅のまに〳〵、祠の宮を建設遊ばし、吾等三人の弟子と共に潔く月の國ハルナの都へ、神の依さしのメッセージを果さんと、勇み進んで來る折しも俄の雨にライオン河の大激流、目も屆かぬ許りの川巾を水馬に跨り、命カラ〴〵此方へ渡り、日を暮らして、廣野の中に一夜を眠る時しも、バラモン教の殘黨數多襲ひ來り、我友の伊太彦は敵の鋭き手槍に刺され、生死の程もさだかならず、師の君を初め眞純彦は今何處へ行かれたか、何の便りも夏の夜の、月に向つてなく涙、乾く由なき袖の露、憐み給へ月照彦の神」

と述懷を述べ、一生懸命に祈つて居る。

三千彦は漸くにして、川の堤の青草の上に眠に就いた。澤山の蚊が人間の匂ひを嗅つけて、珍らしげに集まり來り、ワン〳〵〳〵と厭らしい聲を立て、三千彦の體一面に折重なつて喰ひついてゐる。此時俄にレコード破りの川風吹き來り、堤上に眠つてゐた三千彦の體を鞠の如く轉がして、あたりの泥田の中へ吹き込んで了つた。三千彦は驚いて立ち上らうとすれ共、泥深くして腰のあたりまで體がにこみ、何うすることも出來ず、チク〳〵と身は泥田に沒し、最早首丈になつて了つた。此儘にしておけば全身泥に沒し、三千彦の生命は既に嵐の前に燈火の如き運命に陷つて了つた。三千彦は一生懸命に天津祝詞を奏上し、せめて肉体は泥田の中に埋めて死す共、我精靈を天國に救はせ玉へと、聲を限りに祈つてゐる。斯かる所へ黒い四つ足の影、何處ともなく現はれ來り、三千彦の體の圍の泥土をかきのけ、泥のついた着物を喰わへて、自分も亦體を半分以上埒土に沒し乍ら、漸く堤の上に救ひ上げた。三千彦は如何なる獸か知らね共、自分を助けてくれたのは、全く神樣の使に違ひあるまいと、双手を合せて、黒い獸を一生懸命に拜み、泥だらけの着物を着けたまゝ、川の淺瀬に飛入りソロ〳〵洗濯を始め出した。黒い影の獸は復川中にバサ〳〵と飛込み、自分の體を洗つてゐる。

三千彦はザッと衣類の洗濯をなし、夏の事とて、白く燒けた河原の砂利の上に着物を干し、自分は蚊を防ぐ爲に、全身を水に漬けて夜を明かすこと、なつた。獸の影は何時しか見えなくなつてゐる。夏の一夜を漸く明かし、能く〳〵自分の衣類を見れば着物一面に毛の生えた如く、厭らしい蛭が喰付いて居る。粘着性の強い蛭で容易におちない、手を以て落とさうとすれば手に喰付き、どこ迄も離れてくれぬ。「エー一層

の事、此着物は川へ棄て、裸の道中で、行く所迄行つてやらうか」と思案を定めてみたり、『いや〳〵待て〳〵、夜分になれば、又蚊の襲撃を防ぐ事は出來ぬ、じやと云つてこれ丈澤山の蛭のついた着物を身につけば又血を吸はれる、ハテどうしたらよからうか』と身の不遇を嘆き、再び堤に上つて、涙にくれてゐた。

遙向方の方より夜前見た黒い獣が矢を射る如く此方に向つて走つてくる。これは初稚姫が三千彦の難儀を前知して、スマートに言ひ含め、救援に向はしめ玉ふたのである。スマートは立派なバラモン教宣傳使の服を喰わへて來た。そして三千彦の前に二聲三聲、ワン〳〵と吠乍ら、尾を振つて、之を着よとす、むる如き形容を示した。三千彦は感涙に咽び乍ら、

三千『あゝお前は畜生にも似ず、賢い犬だなア、よう助けてくれた。キッと神様のお使に違ひなからう。ついては此服は私が頂戴する。併し乍らバラモン教の宣傳使服だ之も何か神様の深い思召があるだらう。之を幸、バラモン教の宣傳使と化け込んで、此テルモン山を向方へ渉つてみやうかなア』

と獨ごちつゝ、手早く服を身に纏うた。フッと足許をみれば、最早犬の影はなくなつてゐた。遙向方の禿山を駈け登る犬の影、猫ほどに見られてゐる。三千彦は淺瀬を渡つて、西岸へ着き、ワザとバラモンの宣傳使氣取になつて、經文を唱へ乍ら進んで行く。

六十許りの白髪交りの婆アさんが二人の侍女を伴ひ、杖をつき乍ら此方に向つて進み來る。三千彦は道の片方に立止まり、『ハテ不思議な婆アさんだ。毘舎や首陀とは違つて、どこ共なしに氣高い所がある。之は大方鬼國別の奥方ではあるまいか』と獨

ごちつゝある所へ早くも三人は近付き來り、

婆『お前さんはバラモン教の宣傳使と見ねるが、私はテルモン山の舘を守る鬼國別の妻鬼國姫でムいます。何卒むさ苦しい所でムいますが、一寸立よつて下さいますまいか、そしてお名は何と申しますか』

三千『ハイ私はお察しの通り、バラモン教の宣傳使でムいます。此度、鬼春別將軍樣と矢つぎ早に尋ねられ、三千彦は俄に假の名を思ひ出す譯には行かず、

の陣中に交はり、宣傳使專門の役を勤めて參りました所、お聞及びもムいませうが鬼春別樣は敵の爲に手いたく敗北遊ばし、やむを得ず私は只一人で此處まで參つたのでムいます。テルモン山の御舊蹟を拜したいと存じ、ヤッとの事で夜を日についで、靈地へ足を踏み入れたとこでムいます』

と長い口上を云つて、其間に自分の名を考へ出さうとしてゐる。もしもバラモン教の宣傳使や錚々たる人物の名に匹敵した事を喋つては直に看破さるゝ虞があると氣遣ひ、どう云つたら無難であらうかと考へた末、今渡つて來た川の名を思ひ出し、俄に元氣よく、

三千『私は宣傳使と云つても、ホンのホヤ〳〵でムいますから、名のあるやうな者ではムいません、アン、フラックと申すへボ宣傳使でムいますが、何卒一度お舘に參拜をさして頂きたいものでムいます』

姫『あ、左樣でムいますか、貴方のお名はアン、ブラック樣でしたか、何と目出たいお名でムいますなア、此アン、ブラック川は昔から濁つた事のない清川でムいますが、其名を負はせ玉ふ宣傳使に出會ふことは、何といふ結構な事でせう。之でテルモ

ン山の館も、萬世不動の基礎が固まるでせう。實の所は夢のお告に『アン、ブラック川の岸邊に行け、そうすればお前を助ける眞人が現はれる……』との事でムいましたので、信賴ない夢を力として參りましたが、矢張り神樣のお告げと見ゐて、尊い名の宣傳使に會ふ事が出來ました。あゝ有難い〳〵』

と嬉し涙をたらし乍ら合掌する。三千彦は眞面目な顏して、

三千『ハイ承知致しました。然らばお世話に與りませう』

姫『早速の御承知、滿足に存じます。……コレ、ケーや、セミスや、宣傳使のお荷物を持たして頂きなさい』

ケー『ハイ何でも持たして頂きますが、別に何もお持になつてはゐないぢやムいませんか』

姫『それでもお背に澤山の荷物を負うてゐらつしやるぢやないか』

ケー『奥樣、あれは荷物ぢや厶いません、宣傳使樣が猫を負うてゐらつしやるのですよ、なア、セミスさん、そうぢや厶いませんか』

三千彦は何時の間にやら背中にブク〳〵とした瘤が出來てゐたが、背中の事とて少しも氣がつかなかつた。

三千『アハ、、、、猫に見ゐますかな、どうで犬に……』

と云ひかけて俄に口をつぐみ、

三千『犬か猫のやうな靈ですから、仕方がありません。まアそう仰有らずに可愛がつて下さいませ』

鬼國姫は『サア參りませう』と先に立つて行く。三千彦は半安半危の面持にて門内

深く進み入り、鬼國姫と共に直ちに神殿に至つてバラモン教の經文を稱へた。三千彦は只聞き覺へに經文のそしり走りを知つてゐる許りで、餘り大きな聲を出し、間違つた事を言つては、忽ち看破さるゝ事を恐れ、ワザと小聲になり、教服に添へてあつた珠數を爪繰り乍ら、一生懸命に念じてゐる。何時の間にやら三千彦の猫脊は元の通りに痕跡もなく直つてゐた。これはスマートの靈が三千彦を無事に館内に送り且つ其身邊を守らんが爲であつた。スマートは館の床下に隱れて守つてゐる。

（大正一二、三、一七、舊二、一、於龍宮館・松村眞澄錄）

第一六章　不臣（一四四六）

神殿の拜禮が終ると共に三千彦は鬼國姫の居間に招ぜられ、茶菓の饗應を受け朝飯を頂き等して寛いでゐる。朝飯が濟むと二人の侍女は此場を立去り鬼國姫は憂ひ顏をし乍ら現はれ來り、

姫『アンブラック樣、よくまアお越し下さいました。折入つてお願致し度い事がムいますが、聞いては下さいますまいかな』

三千『ハイ、私の力に及ぶ事ならば如何なる御用も承はりませう。御遠慮なく仰せ下さいませ』

姫『有難う厶ります。早速ながらお伺ひ致しますが、當館は貴方も御承知の通りバラ

モン教の大棟梁大黒主の神様が、まだ鬼雲彦と仰せられた時分、こゝを第一の聖場とお定め遊ばしたバラモン發祥の舊跡でムいます。吾々夫婦の名は國彦、國姫と申しましたが、鬼雲彦様の御名を頂いて今は鬼國彦、鬼國姫と申して居りまする。就いては當館の重寶如意寶珠の玉が紛失致しまして今に行衛は知れず、百日の間に此玉を發見せなければ吾々夫婦は死してお詫をせなくてはならない運命に陷つて居ります。吾夫はそれを苦にして大病に罹らせ玉ひ、命旦夕に迫ると云ふ今日の場合でムいます。惡い事が重なれば重なるもので、今より三年以前に妹娘のケリナと云ふもの、仇し男と共に家出を致し、今に行衛も分らず夫婦の心配は口で申すやうの事ではムいませぬ。何卒御神德を以て如意寶珠の所在をお知らせ下さる譯には參りませぬか」

三千彦は天眼通が些とも利かないので、こんな問題を提出されても一言も答へる事が出來ない。然り乍ら何とかして此場のゴミを濁さねばならないと一生懸命に大神を念じ乍ら事もなげに答へて云ふ。

三千「お話を承はれば實に同情に堪へませぬ。必ず御心配なさいますな。私がこゝへ參りました以上は必ず神様のお網がかゝつて引寄せられたに相違ムいませぬ。こゝ一週間の間御祈念致し、玉の所在を伺つて見ませう」

と其場逃れの覺束なげの挨拶をして居る。溺るゝ者は藁條一本にも賴らんとする喩の如く、鬼國姫は三千彦の言葉を唯一の力とし大に喜んで笑を湛へ乍ら、

姫「御親切に有難うムいます。何分に宜しうお願ひ致します。そして厚がましいお願ひでムいますが夫の病氣は如何でムいませうかな」

三千『先づ一週間心魂を籠めて祈る事に致しませう。神様は如何しても必要があると思召したら命を助けられるでせうし、又靈界にどうしても御用があると思召したら命をお引き取りになるでせう。生死問題のみは如何ともする事は出來ませぬ。之は神様にお任せなさるより外に道はありますまい』

姫『仰せの如く何時も私も信者に生死問題に就いては、人間の如何ともする所でないと說いて居ますが、さて自分の身の上に關するとなるとッイ愚痴が出たり、迷ふたりしてお恥しき事でムいます。それから、も一つ申兼ねますが娘の行衛でムいます彼娘はまだ無事に此世に殘つて居るでせうか。或は惡者の爲めに殺されたやうな事はムいますまいか。それ計りが心配で堪りませぬ』

三千彦は何れも此れも宜い加減な返事はして居れない。エー、まゝよ、一か八かと決心して

三千『娘さんの事は御心配なさいますな。屹度神様のお惠で近い內に無事にお歸りになります』

姫『ハイ、有難う厶ります。そして娘は今頃は何處の國に居りますか。一寸それを聞かして頂き度いものでムいます』

三千彦はハッと詰まり乍ら肝を放り出して、

三千『つい近い所に隱れて居られます。まア御心配なさいますな。聽て歸られますから然し詳しい事は御神殿で伺つて來なくては申上兼ねますから』

姫『成程、さうでムいませう。何卒御緩りなさいましたら一度御神勅を伺つて下さいませ』

三千『ハイ、承知致しました。これから早速伺つて參ります。併し乍ら誰方もお出でにならぬやうに願ひます』

と云ひ殘し神殿さして進み行く。

三千彦は神殿に進み小聲になつて天津祝詞を奏上し、終つて、

三千『私は大變な難問題にぶつゝかりました。併し乍ら苟くも三五の宣傳使、宜い加減な事は申されません。もし宜い加減の事を申し、化けが露はれたなら、それこそ神樣のお名を穢し、師の君に對しても相濟みませんからハッキリした事を、こゝ一週間の間に私の耳許にお聞かせ下さいますか、但は夢になりと知らして下さいませ。そしてなる事なら吾師の君の所在のほどもお示し願ひます』

斯く念じて暫らく瞑目して居ると忽ち背中がムク〳〵と膨れ出し、犬の樣なものが負ぶさつた樣な重味が感じて姿は見ねど、少し掠つた聲で耳許に囁いた者がある。之はスマートの精靈が三千彦の身を守るべく諭して呉れたのである。さうして其示言は左の通りであつた。

精靈『三千彦殿、其方は大變に心配を致して居るが、玉國別樣一行は應て近い內に此館でお目にかゝれるであらう。そして當館の重寶如意の寶珠は家令の忰ワックスと云ふ者が或目的のために隱して居るのだから、之も只今現はれるであらう。儂は初稚姫の身邊を守るスマートと云ふものだが、鬼國姫に對しては決してワックスが匿して居る等と云つてはなりませぬぞ。然し直樣、現はれる樣に致すから心配致すなと云つて置きなさい。又此家の主人鬼國彦はこゝ暫らくの壽命だから、それは諦める樣に云ふて置くが宜い。又娘のケリナ姫は三五教の修驗者に助けられ、近い中に歸つて

來る。之も安心するやうに知らしてやりなさい。尋ねる事は、もう之でないかな」

と小さい聲が聞ゑて來る。三千彦は初めて天耳通が開けたものと考へ、非常に喜んで大神に感謝し、莞爾として鬼國姫の居間に引返した。鬼國姫は三千彦の何處ともなく元氣に充ちた顏色を見て、

姫『こりや些と有望に違ひない』

と早くも合點し、さも嬉しげに、

姫『これは〳〵アンブラック樣、御苦勞樣でムいました。御神德高き貴方、定めし神樣のお告げを直接お聞きなさいましたでせう。何卒お示し下さいませ』

三千『イヤ、さう褒められては恐れ入ります。何を云つてもバラモン敎へ這入つてから俄に拔擢されて宣傳使になつたものゝ、經文も碌にあがりませぬ。只信念堅實と云ふ廉を以て宣傳使にして貰つたのですから、バラモン敎の敎理は少しも存じません が信仰の力によりまして天眼通、天耳通を授けて頂いて居ります。それで何んな事でも鏡にかけた如く知らして頂けます』

姫『イヤ、結構でムいます。今の宣傳使は難い小理屈ばかり云つて、朝から晩まで經文の研究に日を暮し、肝腎の信仰が缺けて居ますから、神樣のお取次であり乍ら些とも大神の意思が分らないのでムいますよ。何を云つても不言實行が結構でムいます。さうして神樣は何と仰せられましたかな』

三千『はい、明白した事は分りませんが私のインプレッションに據りますれば此お舘の重寶は近い中にお手に這入ります。屹度私が貴女にお手渡しをしますから御安心下さいませ。そうしてお孃さんは日ならずお歸りになります。然し乍ら旦那樣はお氣の

毒乍ら天國へ御用がおありなさるそうだから先づお諦めなさるが宜しからう」

姫『どうも有難う厶りました。神様の御用で昇天するとあれば止むを得ませぬが、成る事ならば夫の生存中に如意寶珠の在所が分り、又娘の顔を一目見せ度いものでム いますが如何で厶りませう。これは叶ひますまいかな』

三千『イヤ、御心配なさいますな。之は屹度現はれて參ります。そして御主人が如意寶珠を抱き、片手に姫さんを抱いて喜び勇んで國替をなさいますから、まア一時も早く神様のお繰合せをして頂くやう御祈願を成さいませ。私も一生懸命に御祈願致します』

姫『ハイ、有難う厶います』

と嬉し涙にかき暮れる。斯かる處へ家令のオールスチンは衣紋を繕ひ現はれ來り、

オールス『もし、奥様、旦那様が大變お苦みで厶います。そして奥を呼んで來て呉れと仰有いますから何卒早く側へ行つて下さいませ。私は宣傳使のお側にお相手を仕りますから』

姫『アンブラック様、今家令の申した通り、主人が待つて居りますから一寸行つて參りますから何卒御緩りとお休み下さいませ』

と云ひ捨てゝ忙しげに此場を立つて行く。

オールスチンは三千彦に向ひ、

オールス『宣傳使様、どうも御苦勞様で厶います。お聞及びの通り此お舘には大事が突發致しまして上を下へと騒ぎ廻つて居ります。どうか貴方の御神德によりまして、此急場が逃れますやうにお願ひ致し度う厶います。そして神様の御神勅は如何で厶

いましたか」

三千「御心配なさいますな。如意寶珠の玉は決して外へ紛失はして居りませぬ。此お舘に出入する相當な役員の息子が、或目的を抱いて玉を匿して居ると云ふ事が、神樣のお告げで分りました。聽て出て來るでムいませう」

オールス「エ、何と仰有ります。あの如意寶珠の寶玉を此身内の者が匿して居ると仰有るのですか。そして此舘へ出入する重なる役員の息子とは誰でムいませう。參考のためにお名を聞かして頂き度うムいますが……」

三千「まだ私も修行が足りませぬので、隱した人の姓名まで明白り云ふ事は出來ませぬ、丸顔の色白い男だと云ふ事だけは確に分つて居ります」

オールス「はてなア、妙な事を聞きまする。然し乍ら誰が匿してあるにせよ、之を探し出さねば鬼國彦樣の言ひ譯が立たず、又此舘の役員迄が大黒主から嚴しい罰を受けねばなりませぬ。そしてその玉は近いうちに現はれるでムいませうか」

三千「屹度現はれます。成るべく事を穏かに濟ませ度いと思ひますから、何卒秘密にして置いて下さいませ。互に瑕がついてはなりませぬからな」

オールス「成程、仰有る通りでムいます。こんな事が外へ洩れては一大事、一時も早く現はれますやう、そして旦那樣に一時も早く安心の行くやう、願つて下さいませ」

三千「ハイ、承知致しました」

斯かる所へ鬼國姫は再び現はれ來り、

姫「もし、宣傳使樣、主人が大變に樣子が惡うなりましたから、何卒一つ御祈禱をしてやつて下さいますまいかな」

三千『それはお困りです。然らば參りませう』

と云ひ乍ら家令と共に主人の居間に通つた。

鬼國彦は熱に浮かされて囈言を云つて居る。そして時々、ワックス〳〵と呻いて居る。ワックスとは家令のオールスチンが息子である。オールスチンは之を聞くよりハッと胸を撫で俯向いて思案に暮れて居る。鬼國姫は少しく聲を尖らし乍ら、

姫『これ、オールスチン、今旦那樣が夢中になつて「ワックス〳〵」と仰有るのはお前の悴の名に違ひない。何か旦那樣に對し、御無禮の事をして居るのではあるまいか。よく調べて下さい。此宣傳使樣にお尋ねすれば直分るだらうけれど、斯んな事まで御苦勞になるのは畏れ多い事だから、お前、心に當る事があるなら包まず隱さず、ワックスの事に就いて述べて下さい』

オールス『ハイ、心當りと申しては何もムいませぬが、兎も角宅へ歸りまして悴を調べて見ませう。暫らくお待ち下さいませ。然らば奥樣、旦那樣をお大切にして下さいませ。アンブラック樣、左樣ならば一寸宅まで歸つて參ります。何卒宜しうお願ひ申します』

と言葉を殘し急ぎ我家を指して歸り行く。

オールスチンは館を出でゝ我家に歸る道すがら幾度となく吐息をつき、何事か心に當るものゝ如く首を傾け乍ら、杖を突きトボ〳〵として我家に歸り行く。田圃の稻葉は風に煽られてサラ〳〵と勇ましく鳴つて居る。燕は前後左右に梭をうつ樣に黑い羽根の間から白い羽毛を現はし、或は高く或は低く大車輪の活動を稻田の上にやつて居る寢むたさうに梟の聲はホウ〳〵と家の後の森林から聞ゑて居る。オールスチンは秘か

に吾家の門口に歸つて見ると二三人の人聲が盛に聞ゑて居る。心にかゝるオールスチンは耳をすませて門の戸に凭れ話の樣子を立聞きして居た。

（大正一二、三、一七、舊一、一、於龍宮館、北村隆光錄）

瑞　月

熱の無き鋭き焔の乃もて
　切り開き行く大和魂
これは霜雪にやあるとよく見れば
　あしたの芝生劒かざしつ

第一七章　强請（一四四七）

オールスチンの舘には悴のワックスとエキスとヘルマンの二人が胡坐をかいて密々話に耽つて居る。

ワックス　「お前達二人はさう何遍も〳〵無心に來て吳れては困るぢやないか。俺もお前の知つて居る通り部屋住だから、さう金が自由になるものぢやない。あの禿ちやんが甘く死んで吳れたら此家の財産は俺の自由だからどうでもしてやるが……さう云はずに暫く待つて居て吳れ、さうすれば鬼國別夫婦は玉の紛失の咎に依つて職務を取り上げられ、嚴罰に處せられて了ふ、さうすりや俺がこの玉を發見したと云ふて大黒主樣に屆けたならば、きつと鬼國別の跡目相續をデビスにさすに定つて居る。さう

すれば俺が玉を發見した褒美として婿になるのだ。モウそこに出世がぶらついて居るのだから、さう矢釜しう云はずと暫く待つて居て吳れ、その代り、お前を重役に守立て、さうして幾何でも金は渡してやるからなア。親父に悟られやうものなら、家を放逐され一も取らず二も取らずになつて仕舞ふ。そうすればお前達も困るぢやないか」

エキス、ヘルマンの兩人はワックスの惡友で常に好からぬ事許り勸めては親父の金を盜み出させ飲み喰ひに費してゐた。ワックスは元來が何處かに抜けた所のある馬鹿息子である。けれども家令の息子と云ふ事で非常に若い者の仲間には持て囃され、調子に乘つては親父の金を盜み出し、惡友と共に飲食に費つて居た。父のオールスチンは女房には先立たれ、唯一人の悴ワックスを力とし、目の中に入つても痛くない程愛して居た。それ故段々增長して手にも足にも合はなくなつて仕舞つた。そしてワックスは鬼國別の娘デビス姫に戀慕し、明けても暮れてもデビス〳〵と口癖のやうに言つて居た。併し肝腎のデビス姫は、馬鹿息子のワックスを蚰蜒の如く嫌ひ、目を細くして言ひ寄る度に、手嚴しく肱鐵をかませ恥かしめて居た。併し乍らワックスは益々戀が募つて嫌へば嫌ふ程可愛くなり、何とかして目的を達せんものと、エキス、ヘルマンの二人に相談をかけた。狡猾いエキスは一も二もなく嘲笑つて云ふ。

エキス　『デビス姫を君の妻にせうと思へば何でもない事だ。如意寶珠をそつと盜み出し隱してやつたなら、きつと盜督不行屆きの廉によつて鬼國別夫婦及び家族一同が兎嘯を喰ひ、その上刑罰に處せらるゝに定つて居る。まづ第一に其玉を隱し心配をさせてやると、鬼國別夫婦が、終の果には百計盡きて、『もしもあの紛失した如意寶

珠を探して來た者があつたらデビス姫を遣らう」とか、「婿にせう」とか云ふに定つて居る。先づ其玉を隱すが一番である」

とエキス、ヘルマンが智惠をつけた。そこで薄野呂のワックスは夜密かに奥殿に忍び込み、エキス、ヘルマンと共力して玉を盜み出し、床下を堀つて人知れず隱して置いた。そして當座の鼻塞ぎとして百兩宛渡して置いたのである。併しエキス、ヘルマンの二人は、忽ち酒食に使用つて仕舞ひ、幾度も〳〵弱身をつけ込んでワックスの所へ無心にやつて來る。其度毎にワックスもいろ〳〵工夫して渡しておいた。併し父親の金も、もう無い所迄盜み出して渡して居たのだから、もう幾何請求されても渡す金が無いのである。それ故ワックスは最早一文も無いから……暫く待つて呉れ、今に願望成就すれば、幾何でも金をやるから……と斷つて居たのである、されどエキスは……此家合の家には金銀が目を剝いてゐるに違ひない、脅迫さへすれば、この馬鹿息子は幾何でも出して來るに違ひ無い……と惡胴を据ゑ聲を尖らし、

エキス「オイ、ワックス、餘り馬鹿にして貰ふまいかい。金剛不壞の如意寶珠を命がけで盜み出し、もし發覺したら俺達の命がないのだ。さうして甘い汁を吸ふのはお前許りぢやないか。天下一品のナイス、デビス姫さんの婿となり、そうしてテルモン山の神司となつて覇張散らす身分に成れるのぢやないか。俺達兩人は何程お前が出世した所で、デビスを女房にする譯にも行かず、神司にもなれないのだから引き合はないのだ。それだからお前から酒代でも貰つて酒でも呑まねば不安で苦しうて、一日でも斯うして居る事が出來ない。グズ〳〵云はずに百兩許り出さつしやい。夫でなければ自分達も罪になるのを覺悟して、「恐れ乍ら」と罪狀を自白する積だ、そ

れでもよいか」

ワックス『さう大きな聲で云ふものぢやない、近所に聞にたらどうするのだ。俺達の迷惑のみではない親父迄が迷惑するではないか』

エキス『迷惑したつて何でい。俺アもう破れかぶれだ。のうヘルマン、犬骨折つて鷹に取られるやうな荒仕事をやらされて耐つたものぢやない。此奴はきつと目的が成就したが最後、自分の權威を笠に着て、俺達を反對に罪に落すかも知れないぞ。それより今の中にもぐる丈はもぐつて甘い汁でも吸ふて置かねば算盤が持てないや。オイワックスの先生、俺が今バラしたが最後、お前の笠の臺は飛んで仕舞ふぞ。百兩の命は安價ものだ、どうだ買ふ氣はないか』

ワックス『百兩は安價やうなもの、、さう何遍も百兩々々と云ふて來られては堪らないぢやないか。親父の臍繰金迄皆貴樣に出してやつたし、もう逆さに振つたつて血も出ないのだ。些俺の心も察して呉れないか。九分九厘と云ふ所になつて引くり返つては詮らないぢやないか。俺の目的さへ立てば、お前の思ふやうにしてやるのだから』

エキス『ヘン甘い事云つて乞食の虱ぢやないが、口で殺さうと思つても其の手に乘るやうな哥兄ぢやないぞ。末の百兩より今の五十兩だ。さつぱりと五十兩にまけて置くサアきつぱりと出したり〳〵』

ワックス『何程出せと云ふても無い袖は振れんぢやないか。そんな無茶の事を云はずに今暫くの所我慢してくれ、掌を合して賴むから』

エキス『ヘン、貴樣が掌を合して金の一兩も降つて來るのなら辛抱もしない事はないが

拜み倒さうと思つても、そんな事に乘るやうな俺ぢやないわい。こんな大きな屋臺骨をした家の悴でありながら、親父の金が無くなつたと云つたつて誰が本當にするものか、人を馬鹿にするない。出さにや出さんでよいわ。これから俺が一伍一什をデビス姫の所へ知らしに行き、二人が証人となつて報告するからさう思へ。オイ、ヘルマン、こんな奴にかゝつて居ても仕方がないわ。さア行かう」

と立ち上らうとするをワックスは慌て手を握り、眞青な顏をしてビリ〳〵慄ひ乍ら、

ワックス「オイ、エキス、さう短氣を出すものぢやない。暫時待つてくれと賴むのにお前も聞き譯のない男だなア。お前も俺の心を知つとるだらう、有る金を隱して千騎一騎の此場合、誰が無いと云ふものか。些考へて吳れ」

エキス「千騎一騎の場合になつてゴテ〳〵云ふ奴は駄目だ。考へもへチマも有つたものかい、藥罐頭の歸つて來ない中に早く出さないと陰謀露見の恐れがあるぞ。貴樣は親父が怖いのか。親父が怖いやうな事では伊勢神樂は見られないぞ……

親の財產あてにすれや
藥罐頭が邪魔になる

と云ふのは俺達の爺の事だ。貴樣らは親一人子一人、羊羹よりも甘い奴だから、貴樣が何程盜み出して俺に吳れたとて、悴の命とつりがへだと聞いたら、滅多に怒る氣遣ひはない、餘程貴樣はケチな奴だなア」

ワックス「どうか賴みだから、今日丈は柔順く歸つて吳れ、何とか又考へて置くからな

ア」

エキス「俺も男だ。一旦口へ出した以上は滅多に耻を掻いて歸るやうな哥兄ぢやないぞ

サア、グズ〳〵云はずに出しやがらないか、グズ〳〵云ふと此鐵拳が貴樣の頭におみまひ申すぞ」

と飛びつかうとする。ヘルマンは慌て後より抱留め、

ヘルマン「待つた〳〵、短氣は損氣だ、大事の前の小事だ、今短氣を出しては俺達三人の首は無くなるぢやないか。首が無くなつては酒を飲むと云つたつて飲めないぢやないか。今日はまア此處の銀瓶でも持つて歸らう、ナア、ワックスさん、金の代りに銀瓶ならお前も何とも云ひはすまい」

ワックス「夫は何卒耐へて呉れ、今親父が歸つて來て調べたら大變だからのう」

エキス「そんなら床の置物が無垢らしいから、彼品を攫つて行かう、これなら千兩や二千兩の價値はあるだらうから」

ワックス「何卒それだけは耐へて呉れ、親父に見つけられては困るからなア」

ユキス「へン、二つ目には親父〳〵と吐しやがつて、親父を煮汁に俺達の要求を拒絶する考へであらう、同じ穴の貉だ。親父だつて貴樣の陰謀をすつかり知つて居て、素知らぬ顔をしてけつかるのだ。ね、もう斯うなつては構ふものか、惡胴を据ゑて百兩渡すか、この無垢の置物を渡すかする迄は、十日でも廿日でも坐り込んで動かない覺悟を定めやうかい」

ヘルマン「ワックスの云ふ通り、今日は柔順く歸つて遣らうぢやないか、俺達も矢張疵持つ足だからなア」

エキス「俺は一旦云ひ出した事は後へは退かぬのだ。馬鹿らしい、男がこれ丈金銀の目を剝いて居る家へ來て請求すべきものを請求せずして歸る事が出來るものか、貴樣

もよい腰抜けだなア」

ヘルマンはムッと腹を立て、顔を眞つ赤にしながら、腹立紛れに何も彼も忘れて仕舞ひ、

ヘルマン『こりやエキス、惡垂口を叩くにも程がある。俺が腰抜けなら貴樣は魂抜けだ。今に目に物見せてやらう、覺悟せよ』

と云ふより早く床にあつた無垢の置物をグッと頭上にさし上げ、エキスを目蒐けて投げつけた。エキスは避け損うて向脛にカンと打ちあてられ、

『アイタ、、』

と云つたきり座敷の中央に倒れて仕舞つた。折柄門口を慌たゞしく押し開けて這入つて來たのは此家の主人オールスチンである。

オールス『オイ、ワックス、私の留守中に何を喧嘩して居るのだ。些靜かにせないか』

ワックス『へエ、ほんの酒の上で譯もない喧嘩をおつ初めまして誠に申譯がムいません』

オールス『さうではあるまい。最前から門口ですつかり立聞をした。貴樣等三人は如意寶珠を盜んだ大罪人だ。假令我子と雖も許す事は出來ぬ。サア三人とも手を後へ廻せ』

ワックス『お父さん、誠に濟まん事を致しました。併し乍らもう今日限り心を改めますから、何卒内証にして下さい』

オールス『馬鹿を云ふな、誠の道に親疎の區別はない。オールスチンの忰に貴樣のやうな大惡人が出來たかと思へば、神樣に對し、先祖に對し、申譯がない、どうして俺の顔が立つか。グズ〳〵云はずに罪に伏するが好い。これやエキス、ヘルマンの兩

人、元を云へばお前達が伜に智慧をかつたのだから、お前等の罪が最も重い、併し乍ら伜も惡いのだから免れる譯にはゆかぬ。三人共覺悟してバラモンのお經でも唱へたがよからう」

と兩眼に涙を湛ゑて居る。エキスは吃驚して、

エキス『もしオールスチン樣、誠に濟まん事でムいましたが、是には貴方の息子のワックスも入つて居るのですから、何卒大目に見て下さい。何卒其筋へ突き出す事だけは許して下さい。その代り玉は直樣お還し申しますから』

オールス『玉を還す事は勿論だ。併し乍ら一旦取つた罪はどうしても許す事は出來ん。さても〳〵困つた事をして呉れたものだなア。この儘にして置いたら御主人の家は斷絶、隨つて此家令ち監督不行屆きの罪によつて、どんな嚴罰に處せらるゝかも知れない。貴樣等三人を突出して主家と我家を守らねばならぬ。斯樣な時に伜の愛に引かれて大事を誤るやうなオールスチンではないぞ』

と聲高に叱りつけて居る。三人は平た蜘蛛のやうになつて疊に頭をにぢりつけ、只々詫入る許りであつた。オールスチンは直に神前に額づき『我子の罪を許させたまへ』と一生懸命に祈つて居る。されど一旦大罪を犯した此三人はどうしても助ける工夫は無い。もしも自分の子なるが故をもつて罪を許さば綱紀紊亂の端緒を發し、不公平の譏を受け、誠の道を潰して仕舞はねばならぬ。あゝ如何にせんと瀧の如くに落涙して居る。二人は目と目を見合せ、後から細繩を首に引つかけ引倒し折重なつて締め殺さうとして居る。オールスチンは力限りに、防ぎ戰ひ、逃げ脱れんとすれども力足らず、彼等がなす儘に任すより仕方がなかつた。

ワックス『オイ、エキス、ヘルマン俺の親父をさう甚い事をして呉れな、死んで了うぢやないか。打轉す位はよいけれど、命迄取らうとするのか』

エキス『定つた事だい。此奴の命を取らねば俺達の命が無くなるのだ。貴樣の命もなくなるのだぞ。何を呆けて居るのだ。オイ、ヘルマン俺は老耄をバラして了うから、貴樣はワックスをやつゝけて了へ』

ヘルマン『よし來た』

ヒワックスに喰ひつく。茲に二組の殺し合ひが初まり、ジタン、バタンと怪しき物音が戸外まで聞えて居る。此物音を聞きつけ慌たゞしく飛び込んで來たのは鬼國別の僕エルであつた。エキス、ヘルマンはエルの顏を見るより一目散に裏口から雲を霞と山越に逃げて仕舞つた。そしてエルは最前からの喧嘩の顚末や由來を殘らず聞いて仕舞つた。オールスチンは漸くにして起き上り首筋の痛みを撫でゝ居る。ワックスは、庫の中へ飛び込み中より錠を卸して慄つて居る。エルは一目散にこの有樣を報告せんと宙を切つて舘へ馳歸り行く。

（大正一二、三、一七、於三、一、於龍宮館階上、加藤明子錄）

瑞月

鼻垂男物言ふ花に鼻毛抜かれ
百花壇造る男の鼻赤し

第一八章　寛

恕（一四四八）

鬼國姫は三千彦と共に一間に入つて心配らし相に、密々と話をしてゐる。

姫『モシ、アンブラック様、家令の態度がどうも貴方が御出になつてから、何だかソワ〳〵してゐるやうですから、彼の悴でも若しや玉を隠したのではムいますまいか。吾々夫婦を困らせ窮地に陥れ、娘のデビス姫を女房に致し、良からぬ思惑を立てやうとしてゐるのではムいますまいか。何うも常から怪しいと思つてゐますが、何を云つても家令の悴ではあり、言ひ出しかねて誠に困つて居ります。貴方の御考へは何うでムいますな』

三千『モシ貴女、家令の悴が如意寶珠の玉を隠して居つたとすれば、何うなさる考へでムいますか』

姫『左様な事が判れば、何程家令の息子と云つても許す事は出來ますまい』

三千『こゝは兎も角圓滿に事を濟まさなくてはなりますまい。第一お舘の恥になりますから……、そして世間へバッとしてからは仕方がありませんから、成るべくは内證で濟ましてやつたら何うでムいませう』

姫『玉さへ還つて參りますれば、吾々夫婦の不調法にもならず、皆が助かる事ならば餘り表へ出したくはムいませぬ。併し乍ら之も明瞭した事は判りませんから貴方様に伺つて頂き度いと思つて、主人の病氣の看護の隙に御居間迄參りました』

三千『貴女が如何なる罪も内濟にしてやると云ふ御考へならば申しませう。實は御察しの通り家令の悴ワックス、並にエキス、ヘルマンと云ふ三人の若い者が或目的の爲

寶珠を盗んで隠してゐるのです」

姫「ア、それで合點が行きました。何うもワックスの態度がソワ〳〵して居ると思ふて居りました。家令のオールスチンは極めて忠實な正直な者でムいますから、彼に限つてそんな事をする氣遣はムいませんが、體は生みつけても、魂は生みつけぬとか申しまして、英雄豪傑の忰に馬鹿が生れたり、忠臣義士の子に叛逆人の生れるのは世間に澤山ある習ひでムいますから、家令が貴方の話を聞いて慌てゝ歸りましたのも、何か心に當る事があつたのでムいませう。夫に就て僕のエルをして樣子を考へにやらせましたが何うしたものか未だ歸つて來ませぬ」

三千「ヤ、今に歸られます。さうすれば眞相が解ります。成る可く之は大業にしては成りますまい」

と話す處へ、僕のエルは慌たゞしく歸り來り、息を喘ませ乍ら、

エル「モシ奥樣、タ、大變でムいます。殺し合ひが始まりました」

姫「ナニ、殺し合が始まつたと……何處かに喧嘩をして居つたのかい」

エル「メ、滅相な、殺し合と云つたら喧嘩ぢやありませぬがなア。喧嘩のモ一つ毛の生た事ですがなア。ソレ生命の取合の事ですがなア。怖ろしや〳〵、地異天變々〳〵々〳〵、喉を締める、置物をブツける、喚く、裏口から山越しに逃げ出す、庫へスツ込む、ソレは〳〵偉い事でムいました」

姫「エル、そんな事云つて解るかい。そら一体何處の事だい」

エル「ヘイ、定つて居りますがなア。家の中の事ですがなア」

姫「誰と誰とが喧嘩をしたと云ふのだ」

エル「男と男が命の奪り合をしたのです。エー、解らぬ御方ですなア」

姫「何處の何兵衛だと問ふてゐるのぢや」

エル「エー辛氣臭い。何兵衛も彼兵衛もありますかい。愚圖々々して居ると生命が失くなりますがなア。ア、もどかしい事だワイ」

姫「そんな解らん事を何時迄も云つて居つても埒があかんぢやないか。此方がもどかしいワ。家令の舘へ未だ行かんのか。大方犬の喧嘩でも見て居つたのだらう」

エル「ハイ、その家令ですがなア。それは〳〵偉い事怒つてましたよ。大きな額口に青筋を立てましてね……」

三千「アハ、、、、イヤもうエルさんとやら、分つて居ります。お前さんは隨分慌てゝ居るから、云ふ事がシドロモドロになつて解り憎いが、お前は家令の宅へ行つて四人の喧嘩を見て來たのだらう」

エル「ハイ其通りで厶います。サア之から村中を布令て來ます。大變ぢや〳〵」

と飛び出さうとするのを、鬼國姫は襟髪掴んでグッと引戻し、

姫「コリヤ、エル、何處へも行く事はならぬ。そして何も喋べる事はならんぞ」

エル「ソ、そんな事仰有つても、之が默つて居られませうか。愚圖々々して居ると家令の生命が失くなるか知れませんぞや」

三千「エルさん、まア落付いて下さい。家令は大丈夫だから、そして何も云つちやなりませんよ」

エルは「ハイ」と云ひ乍ら、縮んで了つた。

三千「奥さん、何うやらワックスが隱してゐたところ、家令殿に看破されて一悶着が起

つたと見ます。之は私に任して下さい。キット如意寶珠を持つて歸り御目に掛けます。そして家令の親子を私に任して下さいませ。斯うして發見したのも矢張神樣の御蔭でムいますからなア」

姫「何事も神德高き貴方樣の仰せ、御任せ申します」

と話して居る處へ、家令のオールスチンは、我子のワックスを引立て乍ら、如意寶珠の玉を幾重にも嚴重に包み、此場に現はれ來り、パッと兩手をつき、

オールス「奥樣、誠に申譯の無い事を致しました。伜の馬鹿者が惡い友達に唆され、種々の謀叛を企み、隱して居りましたのを漸く覺り、伜に腰繩をつけて、此處迄お詫に參りました。何れ伜は生命の大罪人でムいますから、思ふ存分にしてやつて下さいませ。私の伜に斯樣な者が出來たと思へば旦那樣へも、世間へも申譯が立ちませぬから……」

と云ふより早く懷劍を引拔き、矢庭に我腹に突立てやうとする一刹那、三千彦は飛び下りて懷劍をもぎとり、聲を勵まして、

三千「オールスチン殿、心を落付けなされ。何事も皆神樣の攝理でムいませう。此問題は奥樣より私が一任されて居りますから、先づ御急きなさるには及びませぬ。今死ぬる命を長らへて御主人樣へ忠義を御盡しなさる方が、何程誠が通るか知れませんよ。そして貴方の息子、ワックス殿も三千彦が預かつて居りますれば安心なさるが宜しい。實の處私はアンブラックとは假の名、實は三五教の宣傳使三千彦と申す者當館はバラモン教だと知つた故に、故意とバラモン教の宣傳使と化け込んで御救ひに參つたのです。今迄我名を詐つた罪は奥樣を始め御一同樣御許しを願ひます」

姫『エー何と仰有います。貴方は三五教の宣傳使様でムいましたか。之はイカイ御無禮を致しました。併し乍らよくまア急場を助けて下さいました。有難う存じます、貴方の御神徳に依つて玉の所在が分り、斯んな嬉しい事はムいませぬ』

三千『三五教と云ひ、バラモン教と云ふも元を正せば一つの神様でムいますから、教に勝劣はムいますまい。只道を奉ずるもの、心に依つて御神徳の現はれに大小高下の區別がつく丈けのものです』

オールス『貴方は初めて御目にかゝつた時から、何處とはなしに變つた御方と思つて居りましたが、三五教の宣傳使でムいましたか。誠に失禮致しました。斯樣な亂痴氣騒ぎを御目に掛け、誠に御恥かしう ムいます。吾々親子はバラモンの顏に泥を塗つたものですから、何卒死なして下さいませ。之ばかりがお願でムいます。そして私の自殺に依つて伜の罪を幾分輕くして下さる事ならば、それを冥途の御土産として、勇んで死に就きます。南無大自在天大國彦命樣……』

と合掌し、決死の覺悟を示して居る。

三千彦は立上り宣傳歌を歌ひ始めた。

三千彦『三五教の宣傳使
　吾は三千彦神司
　神の御網に操られ
　不知々々にテルモンの
　山の麓に現はれて
　清き流れを打ち渡り
　此方に向つて進む折
　鬼國姫の神司
　二人の侍女を伴ひて
　いと懇に我が身をば
　館に誘ひ歸りまし
　種々雜多の御惱み

包まず隠さず宜り玉ひ
同情の涙に堪へかねて
眞心寵めて祈る折
我が耳近く聲をかけ
完全に委曲に相示し
數多の託宣下しつゝ
我れは心も勇み立ち
天地の道理を說き諭し
心も廣き大直日
神の御前に平伏して

はからせ玉ふを聞くよりも
皇大神の御前に
神の化身のスマートが
如意の寶珠の行衛をば
ケリナの姫や其外の
雲路を分けて歸ります
鬼國姫に打ち向ひ
唯何事も神直日
見直しませと勸めつゝ
此難局をいと安く

結ばんために村肝の
時しもあれやエルさんは
家令の舘に人殺
居たりと報告聞くよりも
如何はせんと思ふ折
珍の寶を芽出度も
此瑞祥はテルモンの
瑞祥なりと祝ひつゝ
唯何事も大神の
人は神の子神の宮

心を千々に配りけり
慌たゞしくも入り來り
大騷動が突發し
外へ洩れては一大事
オールスチンの御入來
此處に運ばせ玉ひたる
舘の萬代不易なる
凡ての曲を宜り直し
さばきに任せ奉るべし
元より惡きものならず

八岐大蛇や醜神の　曲津靈に曇らされ
不知々々に惡魔道へ　墮ち行きたりしものなれば
皇大神に吸ひたる　嚴の言靈宣り上げて
いろ〳〵雜多の罪科を　科戸の風に吹拂ひ
拂ひ清めて速川の　流れの如く身體や
靈に塵も止めざれと　皇大神の御前に
三千彦祈り奉る　鬼國姫よオールスチンよ
ワックス司よ心安く　思召されよ三千彦が
こゝに現はれ來し上は　如何でか罪人造らんや
心安かれ惟神　神に誓ひて宣り傳ふ

朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも　誠一つの三五の
教に身をば任しなば　如何なる曲の猛びをも
決して怖るゝ事は無し　尊み敬へ三五の
皇大神の御神德　バラモン教を守ります
大國彦の御稜威　あゝ惟神々々
靈幸はひましませよ」

三千彦の歌にて家令のオールスチン及ワックスはヤッと安心し、涙を流して神恩を感謝し、如意寶珠を奉持して鬼國別の病室に罪を陳謝すべく、鬼國姫、三千彦と共にシト〳〵と進み行く。

（大正一二、三、一七、舊二、一、於龍宮館、外山豊二錄）

瑞　月

献勞の腕はシコタマ飯を食ひ
龜城趾や萬代不動の石たゝみ
小說は謀叛人かと下女は由井
日にやけて光照殿の基礎工事
龜城趾に龜の甲型の石を積み
宣傳使採用されたと宣傳し
名物のツヾジは汽車で久留米籠
天恩の郷にサツキも花咲かせ

（サツキは光秀の母）

第一九章　痴漢（一四四九）

舘の主人、鬼國別はソファーの上に横はり息も絶々に苦しんでゐる。二人の看護手は寢食を忘れて介抱に餘念なかつた。鬼國姫はオールスチン、三千彦、ワックスを伴ひ入り來り、

姫『旦那樣、喜んで下さいませ。三五教の宣傳使三千彦樣のお蔭によりまして如意寶珠の神寶が歸りまして厶います。之を御覽なさいませ』

と包みを解いて目の前につきつけた。鬼國別は病み疲れ、衰へたる目の光りに玉を眺めてニヤリと笑ひ双手を合せて感涙に咽んでゐる。そして只『有難う』と一言云つたきり後の語を次ぐ事は出來なかつた。これは衰弱の甚だしき上に、餘りの喜びに打た

れたからである。三千彦は病人の側近く寄り、

三千「この通り御神寶が歸りました上は、又もや神樣の御惠みによりまして、屹度ケリナ姫樣も近い中にお歸りになるでせう。御安心なさいませ」

と詞優しく慰むれば鬼國別は掌を合せ、娘の近い中に歸ると云ふ證言を聞くより、稍元氣づき、

鬼國「娘が歸りますか。それは有難うムいます。到底私は今度は、もう旅立をせなくてはなりませぬ。せめてそれ迄に紛失した如意寶珠を、もとに還し、娘の顏を生前に一目なりと見て此世を去り度いと思ふて居りましたが、斯う弱りきつては、もう三日も命が續きますまい。成る事ならば一時も早う引寄せて頂き度うムいます」

三千「もう間もなくお歸りになりませう。私の耳の側で神樣がさう仰せになりました。併し乍ら御病氣に障るとなりませんから、吾々は控へさして頂きませう」

鬼國「何卒御自由にお休み下さいませ」

と微の聲で挨拶する。家令のオールスチンは病人の側近くよりオールス「旦那樣、何卒氣を確りして下さいませ。そして如意寶珠の玉を盜んで匿して居つたのは私の悴ワックスでムりました。誠に偉い御心配をかけまして申譯がムいません。此數腹を切つて申譯を致さんと覺悟を定めた所を奥樣に止められ、惜からぬ命を少時延ばしましたが、何卒貴方が命數盡きて御國替遊ばすやうの事あれば屹度私もお伴致します。何卒何處迄も主從の緣を斷らぬやうにして下さいませ」

鬼國別は微に首肯いた。三千彦はワックスの手を曳いて自分の居間へと歸つて行く二人の看護人とオールスチンに鬼國別の介抱を賴み置き、鬼國姫は又もや三千彦の

居間に來り心配さうな顏をして、

姫『三千彦樣、誠に御心配許りかけまして申譯がムいませぬが、主人は到底あきます、まいかな』

三千『お氣の毒乍ら到底駄目でムいませう。併し乍ら假令肉体はなくなつても精靈は活々として若やぎ、靈界に於て神樣の爲に大活動を成されますから、御心配なさいますな。人は諦めが肝腎でムいますからな』

姫『ハイ、有難うムいます。最早覺悟は致して居ります。然し乍ら、も一つ心配な事がムいますが一寸伺つて貰ふ譯には行きませぬか』

三千『何事か存じませぬが一寸云つて御覽なさいませ』

姫『實の所は私の娘デビス姫と申すのが、今日で三七二十一日の間、貴さへ人のよう行かぬアンブラックの瀧へ、玉の所在を知らして下さるやう、父の病氣が癒るやうも一つは妹の所在が判るやうと、纖弱き女の身を以て毎晩二里の道を往復致し、何時も夜明け方に歸つて參りますが、今日は如何したものかまだ歸つて參りませぬ大方瀧壺に落ちて命を捨てたのではムいますまいか。但しは猛獸に殺されたのではありますまいか。俄に胸騷ぎがして氣が氣じやありませぬ』

三千『決して御心配なさいますな。半時經たない間に御姉妹打揃ふて、一人の修驗者に送られて無事に歸られます。間違ひはムいませんからな』

姫『左樣でムいますかな。娘二人が歸つて呉れたならば最早心配事はムいませぬ。あ南無大慈大自在天樣、何卒々々一時も早く娘二人の顏を夫の命のある間に見せて下さいますやうお願ひ致します』

と涙を流して祈り入る。

三千「これ、ワックスさん、お前さんは大それた惡い事を成さつたが、これと云ふのもお前さんの副守護神がやつたのだから、茲に神直日大直日に見直し聞直して頂き、内分で濟ます事になつてゐますから、之から心得て貰はねばなりませぬぞ」

ワックス「ハイ、有難う厶ります。誠に申譯のない無調法を致しました。今度私の罪をお助け下さいますならば、無い命と心得て如何樣なる働きも致し、屹度御恩返しを致します。モシ奥樣、屹度お赦し下さいますか」

姫「赦し難い罪人なれど三千彦樣のお計らひにより内證で濟ます事にして上げやう。之からキッと心得たがよいぞや。年寄つた一人の親に心配をかけ、本當にお前は不孝な者だ。親ばかりか、吾々夫婦や娘に迄も心配苦勞をかけて困らしたのだから、今後は屹度慎んで貰はねばならぬぞや」

ワックス「ハイ、有難う厶います。これから貴方樣を親樣として眞心を盡しお仕へ申します」

姫「これ、ワックス、お前は親があるじやないか、妾を主人として仕へるべきものだ親として仕へる等とはチッと可笑しいぢやないか」

ワックス「義に於ては御主人で厶ります。然し情に於ては親樣と存じてツヒ不都合な事を申しました。然しお赦し下さつた以上は私を子として下さいませうな。實の所はエキス、ヘルマンの兩人が盗み出したので厶いますが、私が種々と苦心をして玉の所在を白狀させ、お家の爲に働いたので厶います。二人の者を助けたさに私が盗つたと父に申しましたが、その實はヘルマン、エキスの兩人が盗み出したので厶います

それをば父に匿して金をやり酒を飲ましして白狀させ、ヤッとの事で如意寶珠を手に入れたのでムいます。貴女はお忘れでもムいますまいが家中一般に如意寶珠の玉の所在を探し、持つて來たものはデビス姫の養子にすると仰有つたぢやムいませぬかさすれば仰せの通り私は御養子にして頂くべき資格があらうと存じます」

姫「そりや、お前の云ふ通り、如意寶珠の玉を探し、持つて來たものは養子にすると云ふて置いた。然しお前は親一人、子一人、家令の家を繼がねばならぬ身の上だから、それは出來ますまい。先祖の家を忽かにする譯には行くまいからな」

ワックス「いゑ、そんな心配は要りませぬ。私が養子になり、デビスさんとの間に三人や五人は子が出來ませうから、其中の一人を頂いて、私の家を繼がせば宜しいぢやありませんか」

姫「もし三千彦樣、あんな事を申しますが如何したら宜しうムいませうかな」

三千彦はワックスの顏をギユッと睨みつけ口をへの字に結んでゐる。ワックスは怖相に少しばかり聲を慄はし乍ら、

ワックス「モシ、宣傳使樣、何卒私を約束通り、玉の發見人ですから養子にして下さるやう御執り成しを願ひます」

三千「これ、ワックス、お前は吾々を盲にするのか、否御夫婦を騙る積りか。今云つた言葉は皆詐りだらうがな。お前はお家の重寶を匿し、御夫婦を困らし、往生づくめでデビス姫樣の夫にならうとの計略をやつたのであらう。そんな事に誤魔化される三千彦ぢやありませぬぞ」

ワックス「メ、、滅相な。さう誤解をされては困ります。あれ丈け苦心してお家の爲め

になる寶を手に入れた此忠臣を、惡人扱にされては根つから勘定が合ひませぬ。何卒も一度お考へ直しを願ひます」

三千「お默りなさい。左樣の事を仰有ると最早容赦はしませぬぞ。高手小手に縛め唐丸籠に乘せてハルナの都へ送り屆けませうか。又何程お前さんがデビス姫樣に戀慕して居つても、肝腎の姫樣がお嫌ひ遊ばしたら如何する積りだ。愛なき結婚でもお前さんは快う思ふのか。家令の悴にも似ず、譯の分らぬ事を仰有るじやないか」

ワックス「吾々を威喝して二人の戀仲を遮り後にヌッケリコとお前さんが養子に這入り込む考へだらう。そんな事あチ、ーンと此のワックスは腹の底まで讀んで居りますぞ」

三千「これはしたり、迷惑千萬、何と云ふ失禮な事を仰せられるか。吾々は三五敎の宣傳使、大切なるメッセージを受けて或所まで進まねばならぬ身の上、女を連れるなどとは思ひも寄らぬ事。お前さんの心を以て吾々の心を測量するとは些と失禮ではムらぬか」

ワックス「宣傳使と云ふものは、そんな事をよく云ふものです。口でこそ立派に女嫌ひの樣な事を云つて居ますが蔭に廻ると、もとが人間ですから駄目ですわい。デビス姫樣が欲しけりや欲しいとハッキリ云ひなさい」

姫「これ、ワックス、何と云ふ失禮な事を申すのだ。玉盜人はお前に違ひない。現在お前の親が證明して居るのじやないか」

ワックスは自棄糞になり、尻をクレッと捲つて此場を後に、一目散に表門を潛つて駈け出した。鬼國姫は手を拍つてエルを招きワックスの後を追跡せよと命じた。狼狽者のエルは皆まで聞かず「ハイ、承知しました」と又もや此處を飛び出し地響きさ

せ乍らドン〳〵〳〵と門外へ駈け出し、道の鍵の手になつた所を、頭を先につき出し體を横にして走る途端に、あまり廣くもない道端の柿の木に大牛が繋いであつた、其牛の尻にドンと、頭突をかました。牛は驚いてボンと蹴つた拍子にエルはウンと許り倒れた。牛は二つ三つ尻を振つて再びエルの睾丸の端をグッと踏み、力を入れてグーッと捻た。エルはキャッ〳〵と悲鳴を擧げてゐる。通りかゝつた旅人や近所の家からドヤ〳〵と集まつて來てエルを助け、傍の或家に舁ぎ込み、樣子を聞けばエルは顏を顰め乍ら、

エル「皆さん、如意寶珠のお寶が手に入りました。そして樣子を聞けばワックスが玉の所在を探した御褒美に、デビス姫さんの婿になると云ふ事ですよ。それから鬼國別樣は御危篤で何時息を引きとられるか分りませぬ。大方今頃は絶命れたかも知れませぬ。大變でムいます。何卒皆さん、一時も早う各自に町内を觸れまわり城内に悔みに行つて下さい」

とまだ死んでも居ないのに、手まわしよく死んだものと假定して吹聽した。之を聞いた若男女は次から次へと、尻はし折り駄賃とらずの郵便配達となつて

「如意寶珠の玉が手に入つた。そして鬼國別が國替をなさつて、ワックスがデビス姫樣の婿にきまつた」

と一軒も殘らず、御叮嚀に布令まわつた。

テルモン山の麓の町は俄にガヤ〳〵と騒ぎ出し、衣裳を着替へて館へ悔みに行くもの引きもきらず、俄に大騒動が起つた樣になつて來た。エルは睾丸の端を牛の爪にむしりとられ益々體中に熱が高まつて「死んだ〳〵」と囈言ばかり囀つて居る。

俄に鬼國別の計を聞いて泣く老若男女ちあれば、馬鹿息子のワックスがデビス姫の婿になるげなと驚いて觸れる奴もあり、如意寶珠の玉が歸つたと喜ぶものもあり、テルモン山の麓の宮町は此噂で持ちきりとなつた。氣の早い男は早くも幟を立て「神司鬼國別の御他界を弔ふ」とか、「如意寶珠再出現」とか、「デビス姫ワックスとの御結婚を祝す」とか云ふ長い幟を立てゝ、ワッショ〳〵と辻々を廻り初めた。

かゝる所へ宣傳歌の聲凉しく町外れの方から聞ゑて來た。此聲は求道居士がデビス姫、ケリナ姫を助けて歸り來るのであつた。

（大正一二、三、一七、舊、二、一、於龍宮館、北村隆光録）

第二〇章　犬

嘘（一四五〇）

テルモン山の舘をエルが飛び出してから半時許り經つと各宮町の住民が、禮服を整へ扇をきちんと手に握り玄關口にチク〳〵と集まり來り、

『頼もう〳〵』

と呶鳴り立てゝ居る。鬼國姫は何事の突發せしならんかと、玄關口へ出て見れば町總代のバインと云ふ男、叮嚀に辭儀をしながら、

バイン「これは〳〵奥樣でムいますか。旦那樣は誠にお氣毒でムいました。嘸お力落しでムいませう。此の通り澤山の町民がお悔に參りましたが、一々御挨拶を致すのも御迷惑と存じ私が總代に出ました。承はれば旦那樣は御昇天との事で御歎きの

所へ如意寶珠の玉が還り、ワックス様とお孃様の御婚禮が調ひましたさうで、お喜び申てよいやら、お悔み申てよいやら、盆と正月が一緒に來たやうに、喜びと悲しみに打たれて居ます。何卒御用があつたら仰つけ下さいませ」

姫「貴方は町總代のバイン様、ようお出下さいました。併し誰がそんな事を申したか知りませんが、旦那様はまだお國替になつて居ませんから御安心下さいませ」

バインは驚いて顏を赤らめながら、

バイン「エ、何と仰有いますか、旦那様はまだお達者で居らつしやいますか、それは何より結構でムいます。誠に申譯のない事を申して失禮でムいました。何卒お許し下さいませ。併し如意寶珠が再びお手に入つたと云ふ事は事實でムいますか」

姫「ハイ有難う、それは事實でムいます。まあ〳〵これでこの節も一安心でムいます」

バイン「それは何よりもお目出度い事でムいます。我々町民一同もこんな喜ばしい事はムいません。就ては御家令の御子息様がお孃様の御養子になられると云ふ事を承はりましたが、それは事實でムいますか」

姫「そんな事を誰にお聞きになりましたか、此方にはそんな噂もして居りませんが」

バイン「ヤ、それ聞いて町内の者も安心を致すでムいませう、斯う申すと何でムいますが、御家令様の御子息は町内中での憎まれもの、根性が惡くて、馬鹿で、極道で、惡い奴を友達にして、町民を困らせて居る仕方のないお方ですから、もしもそんなお方を御養子にでもお貰ひにならうものなら、お家は忽ち潰れて仕舞ひ、宮町の氏子は皆、鬼國別家に背くでムいませう。併し乍ら今承はつてお家のため、實に安

心を致しました。如何なる事情がムいましても、御如才はムいますまいが、義理人情に搦まれて、あのやうな男を御養子になさる事は止めて頂きたうムいます。是はバイン一人の意見ではなく、町内一般の意見でムいますから」

姫「ハイ御親切有難うムいます。何卒町内の御一同樣にも宜敷く言つて下さいませ。又夫鬼國別は何分老齢の事でムいますから、何時變が來ないとも分りません。其時には何卒宜敷く皆樣にお賴み申すと、妾が言ふたと仰有つて下さいませ」

バイン「これは〳〵失禮致しました。左樣ならば是で御免を蒙ります。町内のものが旦那樣がお國替になつたと云つて各自に仕事を休み、又立花、生花などの用意にかゝつて居りますから、早くこの事を知らしてやらねばなりませんから」

姫「もしバイン樣、誰がそんな事を申したのでムいませうねゝ、怪しからん奴がある

ではムいませんか」

バイン「現にお家の受付をやつてゐるエルさんが大勢の前でそんな事を云つたものですから、忽ち町中に擴がつたのでムいます」

姫「何といふまア、チョカ助だらう。さうして何處に居りますかなア」

バイン「ハイ、今エルさんは牛に睾丸を蹴られて綿打屋の座敷に擔ぎ込まれ、大熱を出して譯の分らぬ事許り云つて居られます。併し乍ら隣に籔井竹庵さんがムつたものだから診察して貰つた所、二三日靜養さして置けば癒るだらう、假令間が要つても生命に別條は無いからと仰有いました。エルさんの事は我々がお世話を致しますから御心配下さいますな。それよりも日那樣に氣をつけて下さいませ」

斯く話す所へ黑山の如く弔ひ客や祝ひ客が門を潜つて押し寄せて來る。鬼國姫はバ

インに後を頼み置き夫の傍に走り行く。

バインは町民一同に向ひ大きな聲を張り上げて、

バイン『皆樣御親切によくも來て下さいました。舘の奥樣のお頼みによつて私が代理となり御挨拶を致します。日那樣はまだ御昇天遊ばしたのぢやムいません。番頭のエルが御存じの通りの慌者でムいますから、慌て左樣な事を喋つたのでムいませう。何卒皆樣安心して下さいませ。さうして一つ喜んで貰ふ事は如意寶珠の玉が再び舘へ還つた事でムいます。皆樣の御親切を當お舘の奥樣に代つてバインが有難く感謝を致します』

と述べ終り

『鬼國別舘萬歳ー』

を三唱した。數多の群集は聲を揃へて萬歳を三唱し、各呆氣に取られ、ブツ〳〵小言を云ひながら拍子の抜けた顏をして歸り行く。

ワックスは宮町の四辻に立つて盛に演說をやり始めた。大勢の者は舘からの歸りがけ馬鹿息子が又もや何だか喋り出したと、面白半分やつて來た。ワックスは手を振り乍ら、

ワックス『皆さん、テルモン山の舘には大變事が突發致しましたが御存じですか、よもやお分りではムいますまい。噂にもお聞きでムいませうが三五教の三千彦と云ふ惡神が飛んで參り、金剛不壞の如意寶珠を夜密に盗み出し、鬼國別夫婦を初め一族郎黨に不調法をさせ、大黒主樣の命令をもつて舘は云ふに及ばず、宮町一般の人民を鬼國別の同類と見做し、片端から首をチヨン切らすと云ふ惡い計劃を致して居りま

すぞ。そしてその三千彦と云ふ惡者は、今お舘に大きな面をして居据り、魔法をもつて鬼國姫をチヨロまかし鬼國別樣を病氣に致し、ジリ〳〵弱りに弱らせて命を取りデビス姫の婿にならうとして惡い企みを致して居りますぞ。皆さん、テルモン山のお舘を思ひ、又貴方方自身のお家や、體や子孫をお思ひなさるなら、これから一同力を合せ、お舘に押し寄せ、三千彦と云ふ惡人を懲しめて下さい、否殺して下さい一日も猶豫はして居れませんぞ。　グヅ〳〵して居ると貴方方の難儀になりますぞや。幸ひ拙者はその三千彦と云ふ奴の顏を存じて居りますから、是から御案内を致します皆さん私の云ふ事が御承知が出來ますなら、何卒從いて來て下さい」と呶鳴つた。群衆の中には全部眞實と信ずるものもあり、又半信半疑の者もあつた。併し乍ら、バラモン教の舘の中に三五教の者が來て居ると云ふ事が分り、俄に皆が怒り出し老爺も老婆も子供も、脛腰の立つ奴は群衆心理とやらで再び舘に取つて返し、潮の押し寄するが如く舘の表門にヒシ〳〵と詰めかけた。

リックスの口から出任せの虛構演說によつて忽ち一同憤慨し、舘に押寄せ三千彦を袋叩にした事や、其外いろ〳〵の面白き物語は之にて盡きませんが、紙面の都合によりて後卷に讓ります。

（大正一二、三、一七、舊、二、一、於龍宮館陋上、加藤明子錄）

本日は故井上明澄君の五十日祭に就き口述者參列す。明澄氏神靈の請求に依り白扇一本を靈前に贈る、氏の神靈は第一靈國の天使として教祖の傍近く奉仕し給へり。

大正十二年三月十七日舊二月一日

＝眞善美愛（末の卷）終＝

外山氏を弔ふ詩

瑞月

ア、君は君は
四月の三日
彌生の花の香も
見ずして見ぬ
神國に昇りましぬ
吾は常に君の
深き廣き神愛を知る

君は情熱の人にてありき
海軍に奉仕して
少佐となり
君が敏腕を振ひし
海の昔は音も鳴く
水泡と消ぬし
現實界の果敢なさよ
ア、去れど〳〵
君は大神の愛を悟りて
大本の基礎的神業なる

靈界物語 筆者の
隨一者として
重きを成したり
且つ又君は誠實に
大本歴史の編纂に
全力を傾注したり
其の偉功は
天地と共に
永遠に光輝を放つべし
君の生涯は

餘りに多幸ならずと雖も
その内的生活は
現代の幸運者に比して
最も多幸なりき
その心底に
神國を築き
神の御楯となりて
奉仕の誠を完ふせり
偶々副守神のために
誤られて

稍脱線的
行動に出でし事ありしも
そは外部的情態にして
君が上天の妨げたらず
淨罪界の關門を潛りて
一日も早く
天界に復活されん事を
吾は信じて疑はない
君が靈肉脱離の
その瞬間に於て

朋友知己妻子等に
一點の執着なく
二三の道友に向つて
氣息淹々たる裡より
吾は今
天國に往生せん
左樣ならと
只一言を殘して
神の御國に入りましぬ
ア、何たる

莊嚴さぞ
何たる快男兒ぞ
君が平素
信仰に生き玉ひし
その光明と
武人としての面目とは
最後の一言に依りて
大宇宙に躍如たり
吾は斯かる壯烈なる
大丈夫を失ひて

哀悼に堪らず
終夜君が生時を偲びて泣けり
ア、然れど君は
大神の天使に
導かれて靈國に
勇ましく昇り玉ひ
靈界に在りて
吾が大本の聖團を
益々圓滿ならしむべく
守り玉ふ

御用に仕へ玉ふことを信ず
アヽ健在なれよ君の精靈よ。

＝附　錄終＝

眞善美愛（未の卷）奥附
定價壹圓五拾錢
大正十四年四月三十日印刷
大正十四年五月[illegible]日發行
京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地
編輯發行兼印刷者　櫻井重雄
京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地
發行兼印刷所　天聲社
【振替大阪六〇五三四】
不許複製